
魔法先生ネギまと異世界のサイヤ人

Darkness

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギまと異世界のサイヤ人

【Nコード】

N7930U

【作者名】

Darkness

【あらすじ】

ストライクウィッチーズの世界の第一期での最終決戦で、ネウロイ化ウォーロック赤城（大軍船）とストライクウィッチーズが戦う所やデズモゲヴァルスとアバレンジャーの3大口ボが戦う所が始めたら、ストライクウィッチーズ達と彼らが苦戦した。

最後に彼があり得ない奇跡的に呼び出せた本来のアバレンジャーの敵であるバクレンオーを味方になって、最高の合体をして、バクレンオーキラーになって、やっつけたが…最悪な事が起こった。化け物らが合体してしまったら、今までより大苦戦したから彼が危険の

覚悟を決めた時に、仲間達を安全な所に避難した。彼が、最後の最高の超必殺技を放ったから最後の怪物が、最後の抵抗で、道連れする気であって、彼が、しょうがなくそんな怪物を空へ連れて飛び上って、大爆発した。次元震が起こったら、魔法先生ネギまの世界へ行く時……原作キャラは、その主人公と出会う時、登場人物の性格、原作がどう変わる……。？その主人公は、ネギを生まれる前に英雄、ナギ・スプリングフィールドや王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと出会いから悟龍は彼らを気に入ったが……、正義名乗りの者や彼の息子の傲慢や自慢な性格・正義でない行動が気に入らない。ネギや正義アンチ、原作ブレイク、キャラ崩壊あり。主人公は、不老不死であり、神を超える誰にも負けない最強だ。ただし、ヴォルケンリッターや銀色みたいな狼人を連れる事は、出来ない。この代わりに、新たな仲間が現れるかもしれない。

ブログ&mp・第一話 千の呪文の男やウェスペルタティア王女とチート

この話は、ナギがエヴァンジェリンを助ける前の一ヶ月前の話

ブローグ & amp・第一話 千の呪文の男やウェスperlタティア王女とチート

1985年頃

蒼髪の青年は、ストライクウィッチーズの世界で、スーパー戦隊と仮面ライダーとドラゴンボールの敵が、出現して、彼と仲間たちで倒れた。

蒼髪の青年…… どれかの世界の神より最高の力を持つ彼は、殺す覚悟が殺される覚悟が一番大切な事を言う誰かを認める。例え、彼は、自分が生きる事と仲間を助ける事の為に自分の地獄のような特訓をして、半分は、遊びは、リラックスをする特訓がある。殺気が凄く抽出する人や極悪人が相手にいる時に、甘い所を捨てて、本気で殺す。困ってる人を助ける。その彼が、孫悟龍だ。

ネウロイ化ウォーロック赤城デズモゲヴァルスと道連れするように大爆発した。その中に次元震が起こった。蒼髪の青年を引きづり出し、何処かの草むらに吹っ飛ばれた。

孫悟龍 side

次元震から草むらを現れて、倒れた

額から血がしたり流したり、服をビリビリに破れた。

孫悟龍

「うう……うう……」

顔が上げて、目が霞める。

孫悟龍

「（くそお、目が霞める。再生が遅くなってしまう。）」

孫悟龍

「（ああ、周りは、黒色になっている……く……そ……ッ……も……う……だ……め）」

意識が遠くなり、気絶した。

光りに包まれるから消えた後、背が9歳ぐらいになった。そして、勝手に傷がかなり治せた。

孫悟龍 side out

フードを被る青年は、その彼を見て、彼の襟を掴んで、自分の家に引きづり出す。

孫悟龍 side

重い瞼を開ける。

白い天井が広がっていた。

自分の体を確認する。

頭と上半身が、包帯にぐるぐる巻かれた。

孫悟龍

「知らない天井……」
と呟く。

孫悟龍は、赤いツインテールの少女の目と見つめ合う。

赤い少女

「大丈夫……？」

孫悟龍

「……大丈夫（あれは、オッドアイ目の赤い少女って、唯一魔法無効化を持つ人物、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア）」

赤い青年は、入って、俺が目覚めたことに気付く。

???

「お、起きた。おい！アリカ！！蒼髪のカキが起きた！！」

赤毛の青年が、大きな声で、誰かを呼ぶ

アリカ

「ナギ。大きな声を見ると、蒼髪の子供の怪我に響く。」

アリカという金髪の女性は、部屋に入りながら、ナギに注意する事を言う。

ナギ

「あん。蒼髪のがきが、怪我があっても大丈夫だ!!」
頭を掻きながら言う。

孫悟龍

「（ガキだと……？ってまた7歳になる？（悲））お前らは……」
ガキが言われることを怒るが、落ち着けながら自分のことを調べる事を思つて、お前達の名前を知つたようにわざと知らないふり言う。

ナギ

「俺か？俺は、千の呪文の男、ナギ・スプリングフィールドだよろしく!!」

ナギは、自分を指しながら紹介する。

アリカ

「私は、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだ。あなたの名前は？」

孫悟龍

「俺の名前は、孫悟龍……。（ナギ・スプリングフィールド……アリカ・アナルキア・エンテオフュシア……）それってここでは、魔法先生ネギまの世界で間違えない。でも、ネ

ギまの原作がまだまだ始まらない。」

孫悟龍

「それより俺は、なぜここにいる？」

戸惑いながらキョロキョロとする。

ナギ

「俺が、草むらで気絶したお前をここに連れて行く。」

俺は、それを聞けて、驚愕してから機嫌が悪くなる。

孫悟龍

「助ける事は、感謝するが、なぜ俺みたいな異常者を助ける？」

感謝するように目を閉じれば、凄く魔力を籠もりながら、閉じた両目が、開けると、オッドアイになって、質問する

ナギ・アリカ・アスナ

「……！？」……！」

ナギやアリカやアスナは、俺の凄い魔力を受けて、驚愕するように目が開いた。

ナギ

「（お前の魔力は、ガキのクセに俺の魔力より多い！？おもしれえ！対決したい！）」

アリカ

「（あなたの目は、わが妹、アスナと同じ！？って、お前も魔法無効化を持っている！？）」

アスナ

「（あなたは、強いけど…、孤独で私と似ている。）」

孫悟龍

「む？俺の顔に何かつけるか？」

いつの間に普通に帰って、コテンと頭を傾ぐ。

ナギ

「はっ！なんでもない！それよりお前の魔力は、すげえ！今すぐ俺様と対決すぶぎゃ！！」

ナギは決闘するように言い終える途端にアリカは、ナギをパンツ！と叩く。

アリカ

「バカナギ！孫悟龍の傷がまだ残っているままに戦闘が出来ない！！」

俺は、そのやりとりを見て、茫然をしている。

孫悟龍

「……………あの、俺の傷は、消えた。」

ナギは、もう立ち直した。

ナギ・アリカ

「「え？」」

俺は、包帯をとっている。

アリカ

「あ、ちよつと・・・取つてはダメ。」
心配する様な声をする

俺は、包帯を外れて、傷や血が既に消えた。

ナギ・アリカ・アスナ

「へ（え）・・・」……！」

彼らは、俺の傷の所が、完全に消えた事を驚愕したように戸惑う。

孫悟龍

「ふむ。俺が眠った間に自己治癒が2時間治せた。それにナギという青年は、俺と対決をしたいか？」

ナギは、それを聞いて、我に返った。

ナギ

「へっ！？当たり前だ！！最強の千の魔法の男、俺様が、誰にも負けるわけがない！！」

アリカは、ナギを見て、呆れるそつにため息をする。

アスナは、相変わらずに無表情のままにナギを見る。

孫悟龍

「ほっつ。なるほど。でも、相手の実力に気づけない？」

ナギ

「何？」

孫悟龍

「はあ。やはりおまえは、バカ。」
呆れるように言う。

ナギ

「なんだと!？」

俺は、叫んだナギをスルーして、アリカに向いている

孫悟龍

「アリカさん、審判をよろしく。」

アリカ

「フム。分かった。」

ナギがなにを叫ぶと、スルーする

広場

アリカは、審判をする。アスナは、500m離れても俺達が戦うことを体育座りで傍観する。

俺は、準備体操をし、ナギは、杖を持つままにやる気が、十分になった。

アリカ

「準備は、いいか？ナギ、孫悟龍？」

ナギ

「おう！いつでもいい!!」

と答えた

俺は、無言で答えたように頷いた。

アリカ

「開始!!」

掛け声がしたと同時に先にナギが、俺へ慣行するように地を滑る。

ナギ

「おりゃああああ!!!!.....ぐふっ!」

俺の顔を殴りかかるとしようが、一瞬で、ナギが吹っ飛ばれて、何度も転ばれた。

アリカ・アスナ

「!!?」.....!」

ナギ

「え?」

上半身が、起きあがって、何が起ったか分からない顔になった。

孫悟龍

「なるほど。速さは、なかなかだが、俺は、こんなの効かない。」
腕を組みながら言う。

ナギ

「何か起こったか分からねえけど、俺は、絶対に負けない!」

ナギは、また俺へ敢行する。

俺は、ナギの馬鹿な行動を呆れるように見たが.....、気に入った

ように笑う気がする。なぜなら、ナギの行動は、カカロット孫悟空のと似ているから。

俺は、ナギの攻撃を何度も受け流せたり身軽で避けたりする。

ナギ

「避けたばかりして、俺には勝てない!!」
自信が湧いたように言う。

孫悟龍は、それを聞けて、ため息する。

孫悟龍

「ふゝ、わかった。」

そう言う手ズボンズボンのポケットに入り、構える。

ナギとアリカとアスナは、その構えを見て、驚愕していた。

ナギ

「この構えは!?!」

孫悟龍

「ふっ!」

ポケットを刀の鞘代わりに見えないパンチを打てる。

ナギ

「!?!」

直感で何かがくるのが気付けた。

ナギ

「くっ!」

何かをサイドステップのように避けるが、頬が掠める。

ナギは、着陸して、孫悟龍の所に見る。

ナギ

「おい、なぜおまえは、ガトウの技を使える!？」

孫悟龍

「そう。おまえの仲間のガトウが使える技、居合拳。でも、それを答えるのは、禁則事項だ。」

ナギ

「む！俺が勝てば、おまえは、俺たちに教えてくれ!!」

孫悟龍

「やらなければやってみる。」
皮肉な笑みを浮かべる。

ナギは、孫悟龍へ襲いかかったように敢行する。

.....

.....

.....

.....

.....

40分後

アリカ・アスナは、そんな光景を見て、驚愕するように息を呑んだ。

ナギは、満身創痍で肩が疲れるように上下する。それに対して、孫悟龍は、汗を一つもかけずに疲れない。

アリカ

「珍しい。完璧にナギが押される。」

アスナ

「ウソ……」

孫悟龍

「どうした。この勢いはどこやった……お前が弱い？それとも俺が強すぎる？」
挑発的に言う。

ナギは、それを聞いて、苛立つにする。

ナギ

「くそ……！（お前は、師匠と似ている？まあ、それより目の前を倒す）当たる……！」
一撃の拳を突き出す。

俺は、わざと逃げずにそれを受ける。

ナギ

「やった……！」

俺がナギの攻撃を受けたと思ったが、期待するのは、裏切る。

ナギ

「……！」

期待外れみたいに目を開いた。

俺は、受けても、ケロッと平気に立つ。

孫悟龍

「今のは？」

ニヤリと笑い、馬鹿をするように言う。

ナギ

「くそっ！？」

ナギは、距離を取って、ジャンプして、杖を片脚が、乗りながら、呪文を唱え始める。

ナギ

「これはどうだ！！マンマンテロテロ」

孫悟龍

「……………」

無言で腕を組んで、ナギの所を眺めて、仁王たちをする。

アリカは、俺の行動を見て、戸惑う。

ナギ

クム・フルグラティオサヒット・テンベスタアタストリーナ

「雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！」

ナギの詠唱が、完了近くになる。

俺の手が、闇を纏まった雷や風を集まり終わった。

アリカ

「！？（無詠唱で、上級魔法を使う事が出来る！？それにお前の属

性は、雷や風：それに闇！？」

ナギ

ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス

「雷の暴風！！」

孫悟龍

「一黒雷の暴風《ダーカ・ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス》」

色が違った同士の雷がぶつかり、一進一退して、爆発した。

煙から出ている自分の脚で杖を乗る赤毛の青年が、出ている

ナギ

「ちっ！おまえ！まさか、俺の雷をまねやがった！それに黒いになった！ー！やっぱり俺と馬鹿ラカン以外の最強がいる！ー！へっ！面白い！？」ニッ

舌打ちしてから、面白げに言う。

それと同時に、煙が晴れると、俺が、無傷でヒュ〜と鼻歌しながら、余裕で仁王立ちにした。

孫悟龍

「へっっ、やるね。やっぱり流石は千の魔法の男だ。」
感嘆しながら言う。

ナギ・アリカ・アスナ

「「「！？」」」

それを聞けて、驚愕するように目を開いた。

アリカは、なぜ俺はナギの英雄名を知っているか？という感じの顔を浮かべる。

アスナは、アリカと同じに思う。

孫悟龍

「まあ。俺に挑むなんて無駄と思う。」

ナギ

「む！？＃（蒼髪ガキめ、師匠だけじゃなくて大戦で銀髪青年の時と似ている事が感じて、ム力つく！！でも・・・！）ならば！！余裕の笑みを崩して、俺の最強の魔法をする！！マンマンテロテロ……」

コメカミを浮かべて、懐かしいム力つく敵を思い出したから、いつの間に取り出したメモの本を見て、呪文を唱え始めた。

俺は、それを聞けて、その時を待ってたと思うようにニヤリとした。

孫悟龍

「ククク。良い。自分専用のオリジナルの最強魔法をする。ダーク・マギ・デ・スキル……」

ナギ

「えーと、契約により我に従え高殿の王！」
メモを見ながら唱える。

孫悟龍

「大契約により我に従え雷神！」

ナギ

「来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！」

孫悟龍

「来れ邪惡な巨神を滅ぼす極する立つ雷電！」

ナギ

「なっ!？」

彼が最強古代語魔法の大呪文と同じように使うことを驚けていた。

孫悟龍

「ふん。」

面白そうに鼻を鳴らす。

アリカ

「なっ!（お前もナギと同様に最強の魔法を使える!?!）」

ナギ

「百重千重と重なりて走れよ稲妻!！」

孫悟龍

「千重億重と重なりて走れよ焰の稲妻!！」

孫悟龍

「来い!!赤毛のガキ!？」

ナギ

「『千の雷』!?!?!」

孫悟龍

「『剛極の豪雷』!?!?!」

黄色の稲妻と紅色の豪雷がぶつかり、凄く衝撃波を放出する。

アリカ

「きゃっ!？」

衝撃波を受けて、手でスカートを押さえ込みながら、吹っ飛ばされないようにアスナを握る。

アスナ

「くっ!」

ナギの黄色の稲妻が、押され始める。

ナギ

「ぐぐっ!! (バカな!？俺は、最高の全力の魔法を出せたはずのに、押され始める!?)」

一生懸命に防ごうとするが、どうしても押されてしまう。

孫悟龍

「お前が、全力全開の本気を出せたが…、残念だ。俺は、最強の魔法を唱えるために5%の本気を出せた。」

ナギ

「何っ!？」

孫悟龍

「それで終わりだ!？」

そう言い終わると同時に力を入れると、広範囲が少し広くなり、威力が少し上がると、ナギの黄色の稲妻を吞んでいる。最後にナギを直撃する。

ナギ

「うわあああああああ!!??」

ナギの周りに大きなクレーターをした。

アリカ

「ナギ!？」

アリカは、ナギを心配するように走り駆ける。

孫悟龍は、肩が竦めば、息を整えるから、こっちへ来る気配に感じて、振り返っている。

アスナは、無表情で俺の所へ歩く。

アスナ

「悟龍兄さん…凄い。」

孫悟龍

「フ。褒めてくれることをありがとう。」

アスナをやさしく撫でている。

アスナ

「…………… / / / / /」

俺から撫でてくれたことを気持ち良いように顔が赤になった。

ナギ

「きゅ」

それを直撃されたから、目が回るように気絶した。

孫悟龍は、そっちへ行くように歩き、そのナギを見る。

孫悟龍

「それで、やりすぎるのは謝る。それで、勝負の行方は俺の勝ち？」
頭を掻けながらナギに謝るように言い、アリカに向けて、言う。

アリカ

「ああ、確かに孫悟龍の勝利だ。」

孫悟龍

「まあ。ナギが起こるまでに、お前達と関係する大戦の事を教えてくれ？」

アリカ

「ッ！？それは・・・」

言いにくい。

孫悟龍

「む？（なるほど…俺を巻き込みたくない…やれやれ。ふっ、でも、やはりあなた…優しき頑固な王女だ。）まあ、今すぐに話さなくても良い。俺も戦争で人を殺すことがあって、懺悔と後悔をする。」
ありかの行動の意味を理解するように思い、安心するみたいに言う。

アリカ・アスナ

「「！？」」

孫悟龍

「実は・・・」

異世界の事と正義を妄言する人の事（俺が知ってる原作は、伏せる）をアリカに言う。

アリカ

「それは、酷い……。」

手を強く握り、腕が怒りのようにプルプル震える

アスナも無表情だが、怒りの心がある。

孫悟龍

「アリカは、正義を信じる者にやられた所があるか？」

アリカ

「それはどうして……はっ！まさか、MMの上層部は、私を処刑する事と私ために私が父上を殺す事の偽情報私を慕う人などに流せていた。MMの上層部め、絶対に許せない……。」

MMにやられたことを思い出せながら、言う。

孫悟龍

「その通りだ。地球を征服する事や人を苦しめる事と正義を汚せる事をする極悪人や正義になりたくて、周りや人のように見えない事と人を襲わない吸血鬼を勝手に敵と決める事と名声などを欲しいという自欲を持つ人を俺は……いや、俺達は、許せない。」

アリカ

「え？俺達ってお前の仲間がいる？」

俺は、苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

孫悟龍

「それは、俺の仲間は、俺が前に居た異世界に残ってしまった。俺は、一緒に行き、戦えたいが、結局は、一緒に連れて行くことができない。」

アリカ

「っ！悪い事を申し訳ありません。」

アスナは、俺のそんな顔を見て、悲しき顔をする。

俺

「気にしない。それよりナギと言う青年の仲間がいるか？」

アリカ

「ああ、わがバカ夫のナギの仲間は、生真面目な性格だが、特に食べ物周りの決まりごとを重視しておる青年、詠春や「千の刃のラカン」の異名を持つ傭兵剣士。ナギと馬鹿で長髪で筋肉質の変態大男、ラカンや重力魔法を持つ魔法使い風のローブをまとった長髪的美青年、アルやヘビースモーカーのクールで渋い中年男、ガトウとガトウの弟子、タカミチと詠春の弟子、クルト・ゲードルがいる。そして・・・幼い子供の姿をしているが、実際には年齢数百歳である老人は、大戦で死んだ。」

孫悟龍

「なるほど。」

アリカ

「それに私は、お前に質問する事がある。」

そう言い終わると同時に、いつもの王女の表情になる。

アリカ

「お前は、なぜナギの最強の魔法を知っているか？」

俺は、それを聞けて、目を開いたから直ぐにいつもの冷静で不敵な笑みになった。

孫悟龍

「いつから気付けた？……ククク、まさか、俺の紹介から俺の行動に気づけたか？」

極悪人のような笑いをして、ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら、質問をする。

アリカ

「はい。おまえの言葉を引っかけることがある。おまえは、結局……」

——異世界者ですよ

俺は、俯いて笑った。

孫悟龍

「フフハハハハ！まさか、元の世界じゃなくて、つぎこの世界にも元王女のアリカに見破られた。やはりお前達を気に入ったのが間違いない。」

魔王（信長）が魔王のように笑うように言う。

アリカ

「お前達……って私やナギやアスナ？」

それを聞けて、自分とナギとアスナを指しながら、それを傾げる。

俺は、それを見て、頷く。

孫悟龍

「ふむ。なぜナギを気に入ったと聞かれたら、一つは、ナギの事には、彼は、俺の友に似て強敵に向けて馬鹿な行動をするようにとって絶対に楽しい闘いを入ったから。」

やれやれと肩を竦めて、懐かしい友を浮かべ出せるように笑顔を浮かべ出せる。

孫悟龍

「もう一つは、アリカの事には、敵を見破る推理力と見知る人や見知らない人を巻き込んでたくないという優しき心を持つ凄く覚悟と自分自身の責任をする王女を気に入ったから。」

爽やかな風に蒼髪を靡いて、不敵な笑顔で、言う

アリカは、その美しき光景を見て、息を吞んでいる。

アスナは、アリカと同じだが、彼を見惚れる。

孫悟龍

「まあ、俺の今までの経験をお前だけに特別に教える。ただし、お前の仲間達にも誰にも教えるのは駄目だ。」

アリカ

「ナギは、どうして教えないか？」

俺は、それを聞けて、呆れるような溜息をする。

孫悟龍

「あの…、彼は、もし俺の事がバレている時に、俺との約束をした

「へっ！いつかまたお前と戦って、絶対にお前に勝って見る！！？」

孫悟龍

「フン、いつか期待している。ナギ」

アリカ

「フフフ。お前がいる時、私達が初めてナギの仲間と一緒に楽しいことよりもっと楽しい生活することが感じる。それにアスナが初めて人に懐くのを珍しさに見た。」

言いながら、アスナが孫悟龍を懐くように彼の袖を掴んだのを見た

孫悟龍

「それは、その少女が、ずっと孤独だ……」

アスナを優しさに撫でながら、寂しげに言う。

アスナは、彼が撫でてくれる事を気持ち良さにする。

アリカとナギは、それを聞けて、はつとして、気がついて、アスナを見ているのをこの事を思い出させた。

そう。アスナは、連国軍が人のように物を扱われたばかりに言うことや誰が助けに出来ない事を酷く悲しむ事がある。

アリカ

「そう…、アスナ、ゴメンなさい。私も赤き翼もあなたを助けたいけど、邪魔な人がいる。」

アリカは、アスナを抱きながら、悲しみに謝る。

ナギは、助けがない事があるように悔しみが満ちた顔になりながら、俯く

孫悟龍

「悲しむ運命を持つ人がいる。俺は、誰が持つこんな運命を壊せる。あなたたちが昔、大戦したが、敵だけを見たけど、周りの人がいるのに気付けなくて巻き込んでしまった。巻き込まれた人は、英雄と扱われたあなた達を憎む人が少しいる。それに気をつける。ナギやあなたの仲間を襲うかもしれない。」

ナギは、それを聞けて、固まった。

ナギ

「なつ、本当？」

孫悟龍

「ああ。巻き込まれた人がなぜ助けに来ない！？と叫ぶ所でもお前たちみたいな人達を憎みたいに睨む所がある。」

孫悟龍

「アリカ…俺の料理を食べる時に、あんたが自分の料理より旨い事で悔しい顔が浮き出せてしまった。」

ニヤニヤをしながらかう。

アリカ

「それは思い出せたくないでくれ。」
涙目で言う。

孫悟龍とナギが、暗いを吹っ飛ばれるようにドツと笑い出した。俺はアスナがフツと微笑するのを見ている。

アリカ

「コホン／＼／＼／＼。それよりあなたは、何処に行くか？」

孫悟龍

「む？ん。あなた達が活躍した場所に行く。」

ナギ

「む。俺達が活躍した場所って魔法世界へ行くか？」

孫悟龍

「ええ。お前達の話の話を聴けたから興味し始めた。俺は、危険な冒険をやりたい事でも強豪な敵と戦いたい事を感じ始めた。」
グツと拳を作って興味に言う。

ナギとアリカは、それを見て、苦笑する。

孫悟龍

「おつ、いよいよ出る。そうだ、行く前にナギとアスナを渡したい物がある。」

何をポケットから何かを取り出せてナギにこれを渡す。

ナギ

「む？これは何？」

孫悟龍

「これは、俺に連絡したい時に、これを使用してください。」

ナギ

「ああ。分かった」

孫悟龍

「アスナ、これをあげる。」

エメラルド色のネックレスをアスナにあげる。

アスナ

「これは・・・？」

孫悟龍

「もし、おまえがピンチをされる事と自称正義と扱われる誰かがおまえの記憶を消える事をされる時に、これを使う時も勝手に使うときもできる。」

ナギ・アリカ・アスナ

「！！！？？」

孫悟龍の危険な言葉を聞けて、目を開いた。

アリカ

「なっ、なに！？アスナの記憶を消える！？」

孫悟龍

「ええ。記憶を消える理由は、おまえたちの仲間の誰かが死ぬなら、アスナは、きつと悲しむから、その人が、アスナの苦しむ記憶を消えると願うなら、自称正義バカ達が、アスナの意思を聞かずに勝手に記憶を消えるかもしれない。」

ナギ

「つつ！それはいかん！？アスナの意志を聞かずに勝手に消えるなんて許せない！！」

孫悟龍

「そう。俺もイヤ。アスナを助けたいが、時間がかかるかもしれない。」

苦虫を噛み潰したような顔になりながら、言う。

孫悟龍

「それを防ぐために・・・、アスナのためにこれを作る。」

アスナ

「……そう。これをもらってくれてありがとう。これを大切にする。」

孫悟龍

「気がする必要がない。俺は、困惑と苦しむ奴を見たくない……」

ナギ

「おまえは……」

彼と昔に、アリ力を助けられない自分の姿が重なることを思い浮かべる。

孫悟龍

「あつ。いよいよ出る」

ナギ

「そっか。いつか来い。」

アリカ

「またいつかここに遊びを来い。」

孫悟龍

「有難う。（ペコリ）…またな。いつか会おう。ナギとアリカ、アスナ」

礼をして、アリカとナギを背に向けて、フードをかけながら、歩いて去る。

アリカ

「行ってしまった…リュムーン」

ナギ

「大丈夫！！リュムーンは、絶対に誰にも負けない奴だ。」

なぜナギとアリカとアスナは、俺の真名を呼ぶと聞かれるならなぜなら、俺の真名を本人で許していたから。

アリカ

「フフフフ、そう。リュムーンは、大丈夫だ。」

ナギ

「オウ！俺は、いつか絶対に蒼髪野郎に勝つ！」
誓えるように言う

アリカは、そんな夫を暖かい目で見守る。

.....
.....
.....
10年後、俺、孫悟龍は、17歳になって、日本、麻帆良学園に来る。

孫悟龍

「ここか……ナギが聞いた学校だ……」
ナギから聞いた学校を聞いたから、ここへ行っていた。

孫悟龍

「やれやれ。ここまで来た。やっぱりナギと同じバグ筋肉馬鹿野郎に拳闘場で、無茶苦茶に勝った。」
バグ筋肉馬鹿野郎を思い出せながら、愚痴みたいに言う。

孫悟龍

「でも、まあ、フェイトめ、まさか本気のフェイトと本気の50%で戦うなんて初めてだ。ヘッ。またいつか次に会う時、俺がフェイトとお互いに本気全力で戦う。」
フェイトと言う白い少年と戦う事を思い出せながら次の闘いを楽しみに言う。

孫悟龍

「それに結界が薄すぎる。やはりクルトの言うとおりに真帆良^{マホウ}に人質をする……。俺は、正義に心酔した愚か者達がやはり氣にくわな

い。」

孫悟龍

「それより真帆良男子校高等学校に転校する。この学校の学園長に話す。」

真帆良男子校高等学校に向けてザッと歩きます。

孫悟龍は、真帆良男子校高等学校の学園長を自分の転校の理由や説明にして、学園長に俺が猫被りみたいに言い、入学・転校する事が認められたから真帆良男子校高等学校の高校2年生の生徒になった。

孫悟龍は、真帆良の土地を踏んだ。孫悟龍は、登場キャラと出会う時に、どう変わっているか？

ブログ&第一話 千の呪文の男やウェスペルティア王女とチート

クダクダな話です。

次回予告

孫悟龍

「オッス。俺、鷹宏」

孫悟龍

「まさか、真帆良少女校中学校の一人……600年の吸血鬼の少女に出会ってしまった。」

エヴァンジェリン

「お前は、どんな呪いを解く事が出来るか？」

孫悟龍

「…俺は、そんな正義主義馬鹿らと一緒にしないでくれないか。」

エヴァンジェリン

「さあ、私と模擬戦する。」

孫悟龍

「本気の俺に挑戦する事がきつと後悔します……」

エヴァンジェリン

「なっ…何だこの化け物は…」

孫悟龍

「フン。やはり正義バカは、魔法だけで絶対に勝たない。ここは、俺に任せて…インストール。」

第二話「600年の吸血鬼の少女と邂逅・解呪・模擬戦／スーパー戦隊・仮面が降臨」

第二話「600年の吸血鬼の少女と邂逅・解呪・模擬戦／スーパー戦隊・仮面が

彼は、エヴァンジェリン邸と違う別の所に自分が既に作った邸で、寝ていた。

ピピピッと朝の誰かの鳴き声をする。

???

「うん。」

蒼髪の青年は、その音を聞けて、午前6時でパジャマ服のまましっかり目覚めたから、パジャマ服からトレーニング服に着替えたら、自分を怠らないために自分のペースの特訓をしていた。

午前7時までにそれを終わったら、シャワーをされていた。

午前7時20分で自分の分の料理をするから、自分のテーブルに置く。

孫悟龍

「頂きます。」

彼は、朝食を食べる中に、将来とこの原作の事と一緒に考える。

.....
.....
.....

孫悟龍

「御馳走様。」

最後まで食べたから、皿洗いや片づけをする。

午前7時40分で、自分の学校の制服を着替えるから、魔法で鍵をかけてから出る。

彼は、遅刻しないために真帆良男子校高等学校の玄関まで走った。

.....
.....
.....

担任先生と彼は、挨拶し合いしたり、紹介し合いしたり、した。

カーンキンコーンと朝の会が始まる。

担任先生

「はいはい。新しい転校生が来ます。」

生徒達は、おーーーーっと歓声が来る。

担任先生

「はい。孫悟龍、入る。」

ガチャンとドアを開いて、蒼髪の青年が入る。

彼らは、蒼髪の青年を見て、珍しいらしさに初めて見るように息を呑みながら驚愕している。

担任先生

「彼は、転校生、珍しさに中国の蒼髪の人を初めて見たことがない人なんて当たり前だ。おっと、それより紹介する。中国から来た者孫悟龍だ。そして、すべての外国語と日本語や数学の大天才な人です。」

孫悟龍

「二ーハオ。俺の名前は、孫悟龍です。趣味は、剣道や武術や機械いじりです。」

生徒達は、わぁーーーーー！！と歓迎するように大叫ぶ。

孫悟龍は、生徒達が叫ぶ音を聞くのを指が耳を防ぐようにする。

孫悟龍

「（うるせえ。……確かにバカな生徒達でした。しかし、元気すぎ

る。」

そんな生徒達を呆れたように見て、苦笑する。

担任先生

「はいはい。静かにしろ。質問したい人は授業後に質問でくれか？」
その先生の一声で、一斉に静まりかえった。

担任先生

「孫悟龍、一番後ろの席が空いているなら、座ってくれ？」

孫悟龍

「yes, think you. シーサン。」

笑顔で英語と中国語で言うように答える

彼は、一番後ろの席に座った。

担任先生

「さあ、授業を始まる。」

.....
.....
.....

カーンキンコーンと学校の放課後のチャイムになっている。

孫悟龍は、いろいろな授業を学べる事と質問されるばかりのことと
ここの案内をしてくれるのを思い出せて、疲れたようにふくと肩
を竦めながら、それぞれの教科書の種類を揃えるから、自分の鞆に
入れている。

彼の友が、帰るとするが、彼に別れの挨拶をかける。

孫悟龍の友

「また！悟龍、また明日！！」
と笑顔で挨拶をかける。

孫悟龍

「おう。また明日。」
と笑顔でかけ返す。

自分の寮に帰るクラスメート半分の生徒達と自分の家に帰るクラス
メート半分の生徒達がいた。

孫悟龍

「よし。俺も帰る。この前に、この所へ行く。」
鞆を片肩に担うから教室に後をした。

孫悟龍は、世界樹の所に止まるからそれを眺めるように見上げる。

孫悟龍

「ふん。こいつが世界樹……。じゃあ、調べる。」
そう言つと、世界樹の近くに歩ける。

世界樹に手が近づく瞬間に。

???

「待つて。」

強調で彼を待つ声をする。

彼は、その声を聞けて、手が止まる。

???

「初めてお前はクソ爺でもここの結界でもお前の魔力に気付ける事ができない事がある者がいる事を聞いてない。」

孫悟龍

「……それで、なぜ俺に気付けるか？俺は、普通の一般人みたいに自分の魔力を封印していたはずなのに……。」

あの声の所に顔だけが振り返って、言う。

???

「ふん。確かにお前は、自分の魔力を封印していたが、流石私は、初めからお前がここに入った時から魔力をちよつと感じさせるのが逃がせない。」

孫悟龍

「はあ、やれやれ。よくも俺の魔力に良く気付けた。流石は60年の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。」

今度は、踵を返して、少女の正体は、真帆良少女校の制服の姿に今まで長い金色の髪に鋭い目の少女の名前を呼ぶ。

エヴァンジェリンと言う少女は、その呼び方を聞けて、ピクツとし

て、殺気をちよつと放ちながら構える。

エヴァ

「まさか、お前も私を知ってるなら、殺すか？」

そう言つと同時に彼が、いつの間に防音・人払い・盗撮妨害・結界破壊妨害などの特別な結界を展開する。

エヴァ

「っ！？結界！？」

孫悟龍

「誰が邪魔させないために俺が考えて作った特別な結界では、防音・人払い・盗撮妨害・結界破壊妨害などが付けた結界を展開した。」

エヴァンジェリンは、彼に振り返つて、さっきより鋭さに睨んだ。

エヴァ

「ほく、邪魔せずに私と二人つきりで、決闘する……が、お前は何者だ。誰かが出来ない結界をお前が使える。」

彼は、それを聞けて、不敵にフンと鼻を鳴らす。

孫悟龍

「さあ、俺の正体を知りたければ、俺と決闘する。」

邪険に言いながら、戦闘的に構えるから凄く籠める殺気と闘気と魔力を抽出する。

彼女は、それを受けて、ゾクつとして、額から冷汗を流れるから、彼を危険と感じるように、彼から距離をとる。

エヴァ

「（お前のは私やナギより大きさの魔力なんて初めて！？）」

孫悟龍

「どうした。俺から距離をとる？まさか、俺が強いのが怖いか？」

彼女は、彼の言葉でプライドを傷付いたのが、プチンと頭を切れた音をする。

エヴァ

「私が怖い？ふざけない！？私は、「闇の福音」（ダーク・エヴァンジェル）、「人形使い」（ドール・マスター）、「不死の魔法使い」（マガ・ノスフェラトゥ）」などの様々な異名を持ち恐れられているのが、お前みたいなやつと戦うのが怖いじゃない！？」
怒気で言いながら手を強く握るから腕を払う。

孫悟龍は、それを聞けて、どこかの殺人鬼と似ている楽しそうに口端を凄くつり上がった。

孫悟龍

「ククク。さあ、殺し^{遊び}合いをする！」

彼が宣言すると同時に、彼が、速く地を滑るように彼女を襲いかかる。

エヴァ

「つつ！！（速い！？）」

彼が速いように見えない拳を振るつ。

エヴァ

「くっ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

それを避けるようにサイドステップをするから、詠唱を始めた。

彼は、彼女の詠唱の邪魔をしないように立ちながら構える。

エヴァ

「（おまえめ。私の詠唱の邪魔をさせない？まあ、その馬鹿め！きつと後悔する。とつと目の前を倒す）喰らえ！！サギタ・マギカ闇の魔法の射手！
セリエス連弾・闇の50矢！！」

様子見にするように魔法を軽く放つ

孫悟龍

マギタ・マギカ「無詠唱闇の魔法の射手！！
セリエス連弾・闇の55矢！！」

無詠唱で魔法を放つ。

エヴァ

「！？」

自分と同じ属性の魔法を放つ事ができる者を初めて見るみたいに珍しさに驚ける。

互角だが、残った5矢が、エヴァを襲う。

エヴァ

「つつ！！」

すべての矢を避けるとするが、一つの矢だけが、彼女の頬を掠めて、血が出ていた。

彼女は、掠めたはずに、自己治癒で治せた頬を自分で撫でているから彼に振り返って見る。

エヴァ

「なぜお前が闇の属性を持つ事をするか？何者だ…」
凄く鋭そうに彼を睨んだ。

彼は、答えずに無言をする。

エヴァ

「答えないなら、無理矢理に口で語ってくれ！？リク・ラク・ラ・
ラック・ライラック！」
そう言いつと詠唱し始めた。

孫悟龍

「はあ、お前は何処かの王子と似ている。」
やれやれと肩を竦めながら、誰にも聞こえないように呟いた。

どこかの世界の所、プライド高い王子は、誰かの噂を聴くようにく
しゃみをする。

彼女は、詠唱完了近くにいる。

エヴァ

「今度こそ喰らえ！闇の吹雪！！！！」
最高の魔法で彼を襲う。

彼女が放った魔法は孫悟龍に向けて一気に飛来する。そして孫悟龍
が立っていた地点にそれが降り注ぐ。それを見て、自分の勝ちを自
信すると表情をした。その時。

孫悟龍

「無詠唱奈落の業火！！」

放つと、闇の吹雪を押し始めた。

闇の吹雪と奈落の業火がぶつかり合いしたが、火と氷の属性相性が悪くなって、闇の吹雪を消滅し、奈落の業火が、エヴァを襲う。

エヴァ

「なにい！？（バカな！？奈落の業火まで使えて、私の最高の魔法を消滅した！？）うわあああああ！！！」

彼が奈落の業火を使った事を驚愕しながら、この魔法が喰らうから煙を舞い上がるように爆発した。

孫悟龍

「む？やり過ぎる…。」

それを見て、冷汗で頭を掻きながら言う。

エヴァは、煙から落下して、地面に倒れて満身創痕でフラフラと立ち上がるから、肩が疲れるように上下する。傷を彼女の自己治療で治った。

孫悟龍は、自分の手がポケットを入りながら彼女の所に無言で歩いている。

孫悟龍

「なあ。戦闘はなかなか良いだが、さっきからなぜお前の魔力が小さい。」

エヴァ

「はあ…はあ…、ああ！ナギめ！登校地獄という呪いをかけられたせいで本当の力を使えないなら…！！」

孫悟龍は、無言で彼女の愚痴と説明を聞き流した。

孫悟龍

「なるほど、お前が話した事を纏める。じゃあ、俺が解説してあげる。」

エヴァは、それを聞けて、驚愕するようにバツと彼に振り返って言う。

エヴァ

「ホント!？」

彼に詰める

孫悟龍

「ああ。その前にナギが俺の事を説明する事が覚えるか？」

エヴァ

「む？はっ。ああ、ナギめは『お前が解説したい時、蒼髪の青年と出会う。彼は子供でも大人でも化け物に苦しめた所を助ける事ができる。お前もきつと助ける』と言う。私は、まだ疑心でナギの言葉を納得できないのが、謎のお前と出会ったから、ホントか確認するからホントにお前だと分かった。なぜお前の魔力が少ないのに私より強いのか？」

彼は、苦虫を噛み潰せたように片手で頭を抱えている。

孫悟龍

「あゝ、わりい。やっぱりバカナギめが俺の事の説明を言い足りない。ナギは、既に俺の友になった。」

彼女は、それを聞けて、凍れるように身体を固める。

エヴァ

「マジで……？」

孫悟龍

「マジ。まったく。ナギのやつめ、俺に面倒臭い事を任せることに押しつける。いつかナギ、血祭りをする。」

きっぱり言うから諦めにも似た響きが含まれるように溜め息して、さつきより魔力が多くなるようで黒い笑顔を浮き出せて、ゴゴゴゴと轟く音をしながら、額を怒りマークにして、愚痴する。

エヴァは、それを受けて、さつきより多いのを受けて、冷汗をして、少し蒼褪めながら一步に後ずさる。

エヴァ

「（この魔力はなんだ！？私は、お前に初めて恐怖するように震える。！？ナギ、ご愁傷様。）」

手を合わせて、祈るようにする。

孫悟龍

「まあ。それより、俺の事を説明する事と解説する事は、俺のログハウスでやる。その前にいよいよ正義バカ共は俺が使えた結界に気付けて、俺達を逃がせないように周りがたくさん居る。その人達が俺の結界を破壊する気になった。まさか俺達を殺す気になった。」

エヴァンジェリンは、それを聞けて、息を呑んだように驚愕した。

エヴァ

「なんだと！？ちっ！くそジジイとナギが私を攻撃しないと約束し

たはずに……」

くそジジイとナギが居ない時に悪態みたいに言う

今度は、彼も驚愕したから彼女に隠せるようにフツと微笑して、「バカナギめ……」と嬉しそうに呟く。

孫悟龍

「バカナギとお前がジジイと呼ぶ誰かわからないだが、彼らの所為じゃなくて、正義バカ達は、お前みたいな悪の魔法使いがここに居たくないの、ここで殺すと思ひ込んで、お前を倒せば、ナギみたいな正義気取りをしたいと欲望する。」

エヴァは、それを聞けて、納得する。

エヴァ

「なるほど。それで、貴方はどうする？」

困ったように見上げる。

孫悟龍

「な〜に？俺は、バカナギの言うとおりに、お前みたいに苦しめる人を見たくない。それにお前は、昔の俺の孤独感と似ているのでお前を助ける。」

優しさに言い、昔を思い出すように自嘲的な笑いを浮き出す。

彼女は、驚愕するように目を開いて、それを見て、昔の自分と重ねるから。

孫悟龍

「まあ、それよりとつとお前と一緒に俺の家へ戻る。」
話を逸らすように言う。

エヴァ

「でも、周りの魔法使いがいっぱいいるが、逃げるのは不可能だ。どうやって逃げるか？」

孫悟龍

「フン。正義を語るだけの人から逃げる事が出来ないのは俺の辞書にとって不可能はない。転移」とそういうと同時に呪文みたいに呟くから彼の足元に自分の魔法陣が現れる。

彼女は、彼の足元から現れた魔法陣を見て、驚愕する。

彼は、そんなエヴァに自分の手を差し出す。

孫悟龍

「ほら、俺の手を握ってくれ？早くいかないと正義バカ共にやられるかもしれない。」

彼女は、戸惑うみたいな感じで、おそろおそると自分の手が彼の手に近づいて、握る。その時に、彼の魔法陣が光るから、彼のログハウスの所へ転移するように彼らが消えた。

その瞬間に、結界が消えた。

第三者 side

学園長は、ナギと言う英雄がエヴァをもう二度と攻撃しないと約束しちゃった。

だが、魔法使い共は、納得できない。エヴァンジェリンがここに居る事を氣にくわない。真帆良

正義魔法使い共は、彼女はここで居る事を氣にくわない。

正義魔法使い達は、真祖の吸血鬼を倒す為に、教師の仕事を放置したから彼女の所へ行くのが、結界を張る所を見るから気付けた。エヴァンジェリンがいた所を感じたからその所に走って行く。

正義魔法使い1

「くそ！？私達より堅い結界を張るなんて初めてやった！？そちらはどう！？」

正義魔法使い2

「駄目！？この結界は、俺達の魔法を使えたが、効かない！？」

正義魔法使い頭は、それを聞けて、悔しそうでギリツと歯を噛み潰した。

正義魔法使い頭

「くそ。魔法使いの俺達が結界に入るのに……誰がこんなくそ結界に入ることが出来ない！？誰かがこんな結界を消えてくれ！？」
悪態で焦りに言う。

この瞬間に結界が消えた。

正義魔法使い共

『!?!』

結界を消えた事が嬉しくなったが、正義魔法使いは、誰が居る気配がない事に気付けた。

正義魔法使い頭

「バカな!?!いつの間にここを誰がいない!?!...そうか!さっきの結界を張った人が悪の魔法使いとここを連れて去るために張った結界を消えた。でも、彼女は真帆良この呪いをつけるお蔭でここから逃げる事が出来ない!?!近くに居る!?!夜間までここで探す!?!」

正義魔法使い共

『はい!』

バラバラみたいに彼らを探す。

30分後――

正義魔法使い共は、集合する。

正義魔法使い頭

「こちらは、居ない。そちらは!?!」

正義魔法使い1

「駄目。そちらもない。」

正義魔法使い2

「あちらもない。」

正義魔法使い頭

「くそ！？……………！（ゾクツ！？）」

彼らは、禍カらしさ気配に気付けるからその所に振り返る。

地球の動物をモチーフにしており、体のどこかがねじれている怪物とクネクネのような兵士がこちらの方に歩いてくる。

魔法使いの仲間、この怪物らにやられた。

正義魔法使い共は、それを見て、ゾクつと悪寒を感じて、顔が蒼褪めて、恐怖のように震えている。

正義魔法使い共

『うわあああー！ーっ！！』

恐怖したおかげで冷静を捨ててしまったせいでその怪物達へ魔法を放つ。

怪物達は、それを喰らって、煙を凄く舞い上がる。

魔法技を使えすぎたせいで疲れたように上下する正義魔法使い共が、煙が舞った所を見たから驚愕したように啞然と口を開けて、顔が前よりもっと蒼褪めながら目を開く。

怪物達は無傷のままに立つ。

正義魔法使い1

「そんな！？魔法を喰らったはずは無傷をするなんてありえない！？」

怪物が、正義魔法使い共に向けて、何かを放つ。

正義魔法使い共は、それを受けるように周りが爆発する。

正義魔法使い共

『ぐわあああああ！？』

正義魔法使い共は、体であちこちの血を流せて、命を絶てた。

正義魔法使い頭

「……………そ、……………化け物め」

最後まで言い終ったら、ガクツと頭を下げたように命を絶てた。

化け物らは、つまらなそうに見て、この彼を探すようにそれを後にした。

化け物らは、正義でも悪でもない彼が、エヴァンジェリンに自分の事を説明した後から、エヴァンジェリンと共に戦隊に変身すれば自分達を倒す事を知らない。

第三者 side out

孫悟龍とエヴァンジェリンは、彼のログハウスの前に魔方陣が光るから、現れる。

エヴァ

「ここは？」

孫悟龍

「俺のログハウスだ。とっとと入れなさい。」

彼は自分の鍵がかかったドアに魔法の鍵キーで鍵をガチャツと開けて、ドアを開いたから入った。

彼女も、彼の後に入ったから中を見て、息を呑んだように目を開いた。

彼のログハウスの中は、殺風景な所がある。

孫悟龍

「俺は、紅茶する準備をする。これを終わるまでお前がここを見渡したいなら、ここを見渡すなんて構わない。」

エヴァは、ここを見渡して、地下の階段もあるのが、謎のドアに見て、気付けた。

エヴァ

「孫悟龍、このドアはなんだか？」

紅茶を準備する彼に呼び掛け、このドアを指しながら質問するように言う。

孫悟龍

「む？ああ、これは、俺限定の大切な宝物の部屋だが、俺や俺が認めた者だけがこの部屋に入る事が出来る。だが、俺が認めない者が、勝手にドアの鍵を開く時に感電する。」

エヴァは、それを聞けて、冷汗をかけながら、引き攣るような笑みを浮かべる。

彼は、紅茶をテーブルに運ぶから、それに置く。

彼と彼女は、向かい合せて座るが、両者に恐怖感がある雰囲気の流れる。

孫悟龍は、重力を感じるみたいな雰囲気で無言をするように腕を組みながら座る。

エヴァも、孫悟龍と同じ雰囲気するみたいに紅茶をゆっくりと飲む。

孫悟龍

「じゃあ、お前の呪いを解除する事と俺の説明をする事とお前が俺に質問したい事があるなら話す。その前に、紹介する。俺の名前は、闇の異端者、孫悟龍。」

エヴァ

「……私の名前は貴様が話した通りにエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです。」

孫悟龍

「おまえが、なぜ俺が闇属性の魔法を使えるかと疑問で思う。その

答えは、簡単に答える。俺の中に闇があります。」

エヴァ

「フン。で、貴様の闇にとっては何か？」

孫悟龍

「俺の闇では、正義を語ったり平気で人や動物を苦しめたりする事と普通の平和で生きたいという願いをする魔法を持つ人の都合と意思を無視するように無理矢理仲間に入るところをする事と戦いする時には、無関係な人を巻き込む所に気付いて、巻き込んだ人を楯にするみたいに行動する事をする人が嫌い。だが、俺は、その人達を許せない…それが、俺の闇だ。」

そう言っていると、闇の炎で映す目で、負の感情が胸の中に渦巻きながら、籠める闇オーラを抽出して、集中するように両腕に闇の模様が浮かぶ。

エヴァ

「む…」

それを受けるようにゾクつと悪寒する所が感じながら、冷汗をかく。

孫悟龍

「それに2番目の質問は、なぜ俺の魔力が少ない？と思うように疑問する。その答えは自称正義バカに気付いてたくないと思って、そのために魔力を封印する事が出来る。もし、俺が本気出す時には自分の魔力は…ククク、千の魔法の男、ナギを超える魔力を持つ。それだけじゃなくて、雷と氷と光と土と水と焰と闇も使える事ができる。さらに上位古代魔法も無詠唱出来る。もっと更に超古代魔法を使用できる。世界を破壊する力を持つ所がある。」

彼女は、それを聞けて、サーツと蒼褪める。

エヴァ

「（絶対にもう二度とお前に敵を回らない！？）」
誓えるみたいな決意をした。

孫悟龍

「まあ、俺の正義では、苦しめる人を助ける事と自分の正義を貫く事と平和で生きたいと願う人の命や夢を守る事とミスする事を自己責任する事ですが、本当に正義にとっては悪で、悪にとっては正義などの所がある。やっぱり俺は、正義に似合わない。ククク」

エヴァは、それを聞けて、目を開いたように驚愕した。

エヴァ

「ふふふ。はははははははは！やはり！貴様は、私と同じみたいに言う。私以外の者が正義をバカにするなんて初めて！」

孫悟龍

「おや、やはりお前は、俺が気に入った？」
ニヤリと皮肉な笑いが浮き上がる。

エヴァ

「ああ！私は、お前が気に入った！」
彼と同じような笑いが浮き上がる。

孫悟龍

「俺もエヴァンジェリンの事が気に入った。なぜなら、お前と出会ったから俺以外の正義への憎悪を初めて感じるから、俺と似ている闇の中に悲しそうなオーラが見える。」

エヴァ

「なっ！私がいつ悲しんだ……っ！？」

否定に言い終る途端に孫悟龍は、いつの間に椅子から下りて、エヴァに近づくから体を預けるみたいにフワツと優しいように抱ける。

孫悟龍

「いいえ、謝る事がある。そのオーラを見てから、エヴァンジェリンの昔の記憶を見てしまった事を申し訳ありません。お前の家族がお前を吸血化になるとする実験者の所為で死んだからお前が孤独になったから平和と幸福を壊した事で悲しかったり苦しかったりしたが、自分が生きる為に正義バカ共から頑張るように逃げ切れる。本当に俺より凄く酷い苦勞をするのをよくも耐えた。お前は、ここまでに頑張ったが、今だけでつらい事と悲しい事を受けて入れてもいい。」

彼女は、優しさの言葉を聞けて、驚愕するように息を呑むから体が震えながら目から一つの雫を流せた。

そんなエヴァの気配に気付いてから、既にいつの間に防音の結界を張った。

エヴァ

「うわああああー……ん……！」

600年間に溜め込んだ感情を爆発するように凄く号泣するような響きをする。

孫悟龍は、無言で、ゆっくりと撫でている。

……………

.....

孫悟龍は、抱けたエヴァを離れた。エヴァは、「あっ」ともつとも
と思うように残念そうな顔をする。彼は、それを見逃せないのが、
それを言わない。

孫悟龍

「落ち着けるか、エヴァンジェリン？」

エヴァ

「ああ。私を受け入れてくれる事を感謝する。」

孫悟龍

「気にしない。俺のお利口だけで言っている。」
フンと鼻を鳴らしながらそっぽを向かう。

エヴァは、そんな彼を見て、苦笑する。

孫悟龍

「それより俺のことを説明する。」

説明をし始めた。ネギまの原作を知っている事、不老不死の事、仮
面ライダーと戦隊の事、サイヤ人の事、魔法と違う魔法の事などを。

エヴァは、そのことを聞けて、顔でヒクツと引き攣っている。

エヴァ

「お、おい。おまえは、ナギ以上のバグチートだ……」

孫悟龍は、普通に肩を竦めるように頭を掻く。

孫悟龍

「それに俺の真名をお前に教える。」

エヴァ

「む？真名って何？」

孫悟龍

「ああ。それは、俺だけの大切な掟で、真名では、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることは許されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺せている。」

エヴァ

「いいか？私は、お前の大切な名前を受け取ってもいいか？」

孫悟龍

「ふつ。俺は、自分のために生きたい事と強い敵に負けない事を凄く覚悟するのを持つ者と、自分に持たない何かを持つ者を気に入るから、俺から真名と俺の仲間になる事を許せる。お前は、既に俺に持たない何かを持つ者でした。お前は、俺の仲間になってくれか？」

エヴァは、それを聞けて。指で顎を抱けて、考え込む。

孫悟龍

「さあ。俺は、今すぐに無理矢理に仲間に入ってくれと言うじゃないくて、お前の意思を聞き込むだけ。」

エヴァは、それを聞けて、驚愕したように目を開いた。

エヴァ

「フフ、はははははは！！珍しい！！お前は、闇があるだけじゃない、正義バカ共の言い訳と違うのが正義を持つ。」

孫悟龍

「それっていうと……」

皮肉に笑いながら、期待に胸を膨らませると、エヴァも皮肉な笑顔を浮かしながら言う。

エヴァ

「よろしい！？私は、お前の仲間に入ってくれ！！」

今度は孫悟龍も感心するに目を開いたから、フンと嬉しそうに微笑して、立ち上がって、握手するようにエヴァへ手を差し込む。

孫悟龍

「不死鳥の騎士隊へようこそ。」

孫悟龍

「改めて、俺の名前は、孫悟龍。そして、お前に真名を許す。真名は、朱蒼鷹宏。鷹宏と呼ばれるのが構わない。」

エヴァは、フツと皮肉に笑って、立ちあがって、孫悟龍と握手する。

エヴァ

「こちらもよろしく。こちらもエヴァと呼ばれてもいい。」

エヴァ

「その前に気になる。不死鳥の騎士隊って何？」

孫悟龍

「不死鳥の騎士隊とは、鬼と悪魔と化け物を超える異物の化け物を特別な力を持つ者しか倒せる。我々俺と俺の仲間だけは、特別な魔法と気で、その化け物を倒せるのも可能。ただし、ここのおまえみたいな強い魔法使い共はどんな魔法で、絶対にその怪物を倒せる事が出来ない。」

エヴァ

「なんだと…」

吃驚するようで目を開ける。

孫悟龍

「でも、おまえみたいな者を認めるから、俺からその者へ良いプレゼントをあげる。ただし、俺が認めない者は、多分それを使用することが出来ない。俺に連れてこい。」

背に向けて、エヴァに言う。

悟龍とエヴァは、自分限定の部屋に入る。

エヴァは、その部屋の中を見て、驚愕していた。

その部屋では、スーパー戦隊シリーズ・仮面ライダーシリーズの本当のと似ている変身グッズと玩具のロボット（乗り物シリーズと獣シリーズなど）と本当のと似ている武器と仮面ライダーだけの強化形態になるための変身グッズがいっぱいある。

エヴァ

「すごい……。」

孫悟龍は、無言で、仮面ライダーシリーズの変身グッズへ歩いて行って、アタッシュケースを取るから、エヴァの所へ戻る。

エヴァは、彼が持つアタッシュケースに気がつけるように戸惑いもせずに見る。

エヴァ

「この鞆は？」

孫悟龍

「……お前は、仮面ライダーになる。」

そう言うと、アタッシュケースの二つの鍵を開けてから、中身に見せるように開いていた。

中身では、メモリスロットが右側にしかなく「L」を、展開後は横倒しになった「S」を模しているドライバーベルトと白い「E」を模しているメモリである。

エヴァ

「これらは？」

孫悟龍に振り返りながら言う。

孫悟龍

「そのベルトは、仮面ライダーの一つ、仮面ライダーWの中に、仮面ライダーへと変身するベルト、ロストドライバーです。その白いメモリは「永遠の記憶」を宿したガイアメモリです。そのメモリは、お前に適合するのを可能だと思います。」

エヴァ

「永遠……。で、それを私に適合するのを可能？」

孫悟龍

「さあ？そのドライバーとメモリを取って見る。メモリは、お前に適合するか？」

エヴァは、半信半疑するようにながら彼が言った通りにそれらに触れる。

その瞬間に。

エヴァ

「！？」

エヴァの頭に電撃のような衝撃が走る。

孫悟龍は、そんなエヴァを見て、微笑しながらやはりと呟く

エヴァ

「今のは……！？」

孫悟龍

「お前のエターナルメモリには、並々ならない運命を感じた。」

エヴァ

「！？………と言つと！」

孫悟龍

「ああ。エターナルメモリは、エヴァ、お前を求めたように認める。おめでとう。これからお前をスーパー戦隊・仮面ライダーの一員と認める。」

頷きながら、言う。

エヴァ

「エヴァの鼓動が跳ねた。エヴァの心に渦巻くのは自身に制御できない程の狂おしい——歓喜。言葉も出ないほどの歓喜に突き動かされる。」

エヴァ

「フン。私を認める事をくれて感謝する。」
そっぽを向きながら、内心で嬉しいように、言う。

孫悟龍は、それを見て、苦笑する。

その時！

ウーーーーッ！ウーーーーッ！という警告する音をする。

エヴァは、警告音を聞けて、戸惑う。孫悟龍は、険しい顔になりそう。

孫悟龍

「まさか、ここまで来た……！？」
悪態するよつに言う。

エヴァ

「おい、鷹宏。警告音は何だ？」

孫悟龍

「その警告音は、異物の怪物が誰かを襲うから。」

エヴァ

「なっ！？おい！？私の呪いを解除する事より人を助ける事をして
もいい！？」

孫悟龍

「……お前の気持ちを分かっているのが、異物の怪物は、お前より女
子供や老人や大人などの誰でも容赦としない。そして、地球を苦し
める事になるかもしれない。俺は、そんなに気にくわない。例えば、
俺は、偽善者になっても世界の敵になっても人類と地球を苦しめる
強い化け物どもから人類の平和と地球の平和……そして、大切な宝
を守るだけ！！これが、俺の誇りだ！？」

エヴァは、誇りと言う言葉を聞けて、気持ちが何か目覚めたかに震
えるように目が開いた。

エヴァ

「誇り……」

孫悟龍は、申し訳もない顔でエヴァに振り返る。

孫悟龍

「わりい。登校地獄と言う呪いを解除する事は後だ。」
苦虫を噛み潰したような顔で言う。

エヴァは、長い間に無言をするから、フツと微笑するように目を閉
じた。

エヴァ

「分かった。ただし、約束をする。その化け物を倒したから私から呪いを解除してくれ。」
皮肉に言う。

孫悟龍

「フン。分かってる。」
皮肉に言い返す。

闇を持つ神を超える戦士、孫悟龍と悪の魔法使い、エヴァが皮肉な笑い合いするように仲良くなった。

孫悟龍

「よし、いくぞ！」
とそう言つと、エヴァが頷くから、あれを持って、彼女と共に化け物が襲った所へ走り込む。

第三者 side

地球の動物をモチーフにしており、体のどこかがねじれている怪物に指示されたクネクネのような兵士は、人間共を襲うのが、学園長の命令をするナギの戦友、ガトウと似ているトレードマークの眼鏡と無精髭の青年、タカミチを含む魔法使いは、化け物共を阻止して、無駄に凄く苦戦する。

魔法使い達は、化け物どもにやられた痛みに訴えられて、体に血が流されながらウウツと呻いた。

タカミチだけは、満身創痍したままに頑張るように、化け物を阻止する。

タカミチ

「くっ！？（この化け物は、なんてエヴァ以上の力！？それに魔法使いの魔法が効かない！）」

苦況するようにバックステップするように距離を取る。

タカミチ

「……右手に魔法…左手に気」

右手に魔法に包まれ、左手に気に包まれた。魔法と気が混ざると煙が凄く舞い上がる。

タカミチ

「感卦法！？」

その怪物は、そのタカミチを見て、感心するように余裕する。

タカミチ

「豪殺 居合拳！！」

感卦法により、ポケットを刀の鞘代わりにして見えない大砲のようなパンチを打てる。

その技は、その怪物を命中するように煙を舞い上がる。

タカミチは、それはどうかと思うように気を許せずにまだ警戒している。

その化け物は、煙から出るように歩いている。無傷で。

タカミチ

「なっ!?!」

化け物は無傷で歩いた事を見て、このままに勝てないと思い、蒼褪める。

その化け物は、何かを放つ。

タカミチは、それを受けるように周囲が爆発する。

タカミチ

「くっ!?!うわああああ!?!」

彼を吹っ飛ばすように爆発したから満身創痍になったままに何度も転がる。

タカミチ

「クッ……クッ!」

立ちあがるが、凄く痛みを訴えられた事と血がたくさん流れた事をしたから立ちあがった事が不可能だ。

兵士達と化け物が合流する。

化け物は、タカミチ達を狙いにし、とどめにするように腕を振り上げる。

タカミチ

「!?!」

気がついたから、逃げるだが、痛みの所為で逃げ出す事が不可能だ。

化け物は、何かを放つとする。

その瞬間に

エヴァ

「無詠唱！闇の50矢！！」

???がエヴァが魔法を放れたと同時に誰かが銃を撃つ音をする。

化け物共は、誰かの闇の魔法の攻撃と撃たれた銃を受けたから怯みながら2、3歩退く。

タカミチ

「……え？」

誰かが啞然する。

化け物は誰かの攻撃をした所に振り返ってみる。タカミチも振り返ってみる。

タカミチが知ってる魔法を使う奴を見た。彼女、エヴァの隣に初めて見た銃を持つ蒼髪の青年と共に歩いて来る。

倒れたタカミチ達を無視するように通り過ぎると、歩き止める。

蒼髪の青年

「フン。やはり自称正義魔法使いは、化け物に勝てるのを不可能だ。そうだ？エヴァ。」

エヴァ

「ああ。悟龍。魔法を持つ才能を自慢する事をするだけの魔法バカ共は努力をしない事と努力をする事をやるだけで化け物を倒す事では無理だ。」

それぞれの冷酷と冷徹な言葉を正義魔法使い共に聞こえるように言う。

蒼髪の青年は、やはりと呟きながら、撃った銃を肩に担ぐ。

蒼髪の青年

「それに、まさかここまで来た……ネジフレア共め。」

タカミチは、戸惑いながら、なぜ、彼は、化け物の正体を知ったと思う。

第三者 side out

孫悟龍は、トレードマークの眼鏡と無精髭の青年を見て、知っているのが、スルーした。

孫悟龍

「それに、まさかここまで来た……ネジフレア共め。」

化け物共の正体は、ネジフレアが作りだしたネジレ獣と兵士クネクネ達だった

ネジフレア……異次元世界・ネジレ次元に本拠地を置く悪の王国。
三次元世界の征服を目論み、侵攻を開始した。円盤状の要塞デスネ
ジロを攻撃基地とし、そこからネジレ獣や兵士達を送り込む。メガ
レンジャー達を苦しめる敵達。

ネジレ獣

「ふん。やはりここに来たな。真祖の吸血鬼。……そして、どんな
世界を知っている事と救う事をする闇の戦士。」

孫悟龍は、英雄と呼ばれた事を嫌忌にするようにチツと舌打ちなが
ら、腕を組んで、自分の前の敵を鋭く睨む。エヴァもつまらなそう
にフンと鼻を鳴らしながら、鋭く敵を睨む。

孫悟龍

「フン。誰かが俺をそんな英雄と呼ぶ事が嫌忌に聞こえる。もし、
ここにいる誰かが、俺の事を英雄みたいに呼ばれると、俺は、誰を
苦しめた自称正義と自称上司と敵などへの憎悪を増える。」

ネジレ獣

「おゝ、怖い怖い。」

わざと怖い振りをする。

彼は、こめかみを押さえながら、チツと舌打ちをして、冷静を戻せ
て行くから怪我した愚か魔法使い共に振り返って言う。

孫悟龍

「おい、てめえらは、とつとと逃げる。逃げないと、おまえたちは、
俺達の足手まといになってもいい？それに俺達の事と問題の事をお

前達の学園長や愚かな魔法使い共に報告しないでくれ。そうではないと、俺達は、手加減になっても本気になってもここを破壊する。」

愚かな魔法使い共は、ここを聞いて、悔しそうに、痛い体を運ぶように無理矢理に立ち上がって、ゆっくりと逃げる。

孫悟龍

「それで、ネジレ獣。俺達は、テメエと話しているために来るじゃない。とつとと倒してくれ。いくぞ、エヴァ。」

そう言つと、エヴァが、頷くから、彼女と共にスツと手をあげる。いつの間に何かが手首につけた。

ネジレ獣は、それらを見て、目を開いたように驚けて、一歩後退りする。

ネジレ獣

「なっ！？メガレンジャーも使えた！？」

いつの間に手首につける物は、メガレンジャーの変身するためのブレスレット、デジタイザーだ。

孫悟龍・エヴァ

「インストール！メガレンジャー！」

と掛け声すると同時に「3 3 5 Enter」というコードナンバーを入力する。

孫悟龍は、メガレッドへと、エヴァは、メガイエローへと、変身する。

逃げ切れたタカミチ達は、光に気付いて、それらに振り返って見て、

驚けた。

メガレッド

「メガレッド！」

メガイエロー

「メガイエロー！」

それぞれのポーズをする。

メガイエロー

「って！？この姿はなんだ！？」

メガレッドに振り返って、戦隊の服装の事でツッコミをする。

メガレッド

「む？この説明は、化け物と倒すから約束をする後だ」

メガイエロー

「ちっ。分かった。」

渋々と納得するように言う。

ネジレ獣

「おのれ！？メガレンジャーめ！やれ！？クネクネ兵共！！」

クネクネ兵共がメガレッド・メガイエローを襲い掛かる。

メガレッド

「へっっ。雑魚共が俺達に襲い掛かるとはいいい度胸だ。とつとつ消える。」

そう言うと、メガイエローと共に光線銃、メガスナイパーを手に取

つて、クネクネ兵共を撃ちこむ。

クネクネ兵士どもが、それを受けて、怯む。

メガレッド

「ドリルセイバー！」

ドリル部分が秒速2000回転して敵を切り裂く、自分専用の剣を手に現れるように持つ。

メガイエロー

「メガスリング！」

大気中のエネルギーを凝縮させた光弾を放つ、メガイエロー専用のパチンコ型武器を手に現れるように持つ。

彼らは、自分専用を持つように構えるからネジレ獣とクネクネ兵士共を襲い掛かる。

メガイエロー

「はっ！ ふっ！」

メガスリングで次々とクネクネ兵士共を残さずに撃ち抜いていく。

クネクネ兵士共は、それを受けるように火花を散らして、爆発した。

メガイエロー

「フン。本当に雑魚共だ……」

メガレッドの所では。

メガレッド

「ふっ！はっ！ふん！」

ドリルセイバーで次々にクネクネ兵士を斬り続けていく。

その隙について、クネクネ兵士が、メガレッドを襲おうとするが、メガレッド……孫悟龍の前にそんな行動が無意味だ。

メガレッド

「ふっ！」

メガスナイパーを早く手に取って、斬り込むクネクネ兵士を連続に撃ちこむから、爆発した。

メガレッド

「フン。誰かの不意打ちと隙は俺の辞書にとっては無意味だ。」
構えてから再びクネクネ兵士を撃ちこむ。

メガレッドとメガイエローが合流してから、クネクネ兵士共を放電して、爆発した。

メガレッド

「次は、お前の番だ。」

自分専用の武器の切先でネジレ獣に向ける。

ネジレ獣

「己！ここで俺様が、倒す！？」

そう言うから、構えて、メガレンジャーを襲い掛かる。

メガレッドも自分専用の武器を持つままに構えるから、自分もネジレ獣を襲い掛かる。

メガイエロー

「おい！まったく。お前の戦闘行動は赤毛野郎と似ている。」
悪態するから仮面の下で懐かしい笑みを浮かべる。

ネジレ獣は、爪で斬り込む。メガレッドも剣で斬り込む。

メガレッド

「クッ。」

ネジレ獣

「ちっ。」

受けた二人の胸が火花を起こす。

もう一度ももう一度も斬り合う。

ネジレ獣は再び強く斬りかかるが、孫悟龍は、斬りかかられる腕を捕まえる。

ネジレ獣

「なにっ！？」

メガレッド

「フッ！」

ネジレ獣のそんな腕を払い、剣を振るう。

ネジレ獣

「ぐがつ！」

メガレッドは、何度も斬り、強く突き付ける。ネジレ獣は、それを受けて、吹っ飛ばれる。

それを倒れてから、何度も転がる。

メガレッド

「メガイエロー！」

メガイエローは、跳んでから、メガレッドの肩を踏み台にして、メガスリングを撃つ。

立ち上がったネジレ獣は、それを受けるように火花を起きながら、一歩下がる。

着陸するメガイエローに、メガレッドが合流する。

メガイエロー

「やるね。剣の使い手には詠春以上だ。」

メガレッド

「さあ。俺も剣の猛特訓をした。既に剣の使い方を慣れた。おっと、それより話をする場合じゃなくて、今は敵を倒す。」

ネジレ獣は、悔しそうに歪んで、ヨロヨロと立ちあがる

メガレッド

「まあ、止めをする。」

二人は、メガスナイパーを手に取って、ドリルセイバーやメガスリングとメガスナイパーを合体させる。

メガレッド

「ドリルスナイパー!!」

銃を構えるようにする。

メガイエロー

「スリングスナイパー!!」

銃を構えるようにする。

ヨロヨロと立ち上がったネジレ獣を狙いに付ける。

メガイエロー

「はっ!!」

敵を狙い撃ち、強力な光弾を発する。

ドリルセイバーの先端部分が秒速3000回転する。

メガレッド

「ハイパーメカニックバスター!!」

竜巻のような強力なビームを撃ち出す。

ネジレ獣

「ぐわああああ!!」

それらを受けて、放電を放したりあちこちで火花を出したりする。

メガレッド達は、ネジレ獣を背に向ける。ネジレ獣は、倒れたから爆発した。

メガイエロー

「なんて…………それは、魔法より強い…………」

感心するような声をする。

メガレッド

「それだけじゃなくて、超自然も獣拳もどれもどこかより強い。」

女性型のアンドロイドが誰にも気付けない場所を現れる。

アンドロイド

「まさか、ここまで彼は我々の敵、メガレンジャーめも変身するようになれる！？ビビデビ！」

胸の前に手でボールのような形状をした、小悪魔的キャラ、ヒビデビを現れる。

アンドロイド

「ネジレ獣を巨大化にしろ！！」
と命令する。

ビビデビは、ネジレ獣の所へ行くから、ネジレ獣に噛み付くことにより、巨大化ウィルスがネジレ獣の体内に入って作用し、ネジレ獣を巨大化させる。

そのタカミチ達は、その化け物を見て、蒼褪める。

メガイエロー

「む？…！？何だと！私達は、化け物を倒したはずに、大きくなつた…！？」

メガレッド

「ちつ。俺は、しつこい奴が嫌い。来い！メガシャトル！」

冷静に悪態をしながら、スペースシャトルの形状をした小型宇宙艇、メガシャトルを呼ぶ。

メガレッドは、メガシャトルのコックピットを乗りこむからなにかを目的に宇宙へ行く為に運転する。

メガイエロー

「おい！？何処へ行く！？」

宇宙――

どこかがいなかったはずに、銀色のオーロラで宇宙ステーション、メガシップを現れる。

メガレッド

「電磁合体！！」

彼が乗り込んだメガシップとメガシャトルを合体した。

メガレッド

「完成！ギャラクシーメガ！！」

ギャラクシーメガは、地球に降りるから、重力に引き、火を防御するためにメガシールドを構えながら降下し、着陸する。

メガイエロー

「これはなんだ！？」

驚愕するように言う。

メガレッド

「おい！イエロー。ここに乗ってくる！！」

彼女がここに乗り込むみたいに言うから、彼女は、我に帰ってからギャラクシーメガのコックピットに乗り込むように飛び上がる。

メガイエロー

「おい！ここはなんだ！」

メガレッド

「巨大化したネジレ獣を倒すためのロボだ。これは、宇宙や科学で作られたメガレンジャーのロボ、ギャラクシーメガだ。」
納得するように分かりやすいに言う。

メガイエローは、納得したから、コックピットの右側の椅子に座る。

ネジレ獣

「己！？今度こそ倒せる！！」

そう言うから、ギャラクシーメガを襲い掛かる。

メガレッド

「よし！行くぞ！」

操作するからメガサーベルを構えてから襲い掛かり返す。

ネジレ獣は、突撃しながら、牙を振るう。

ギヤラクシーメガは、メガサーベルでネジレ獣の牙を払い、斬り下げる。

ネジレ獣は、それを受けて、一步下がる。

ネジレ獣

「己！それを喰らえ！」

そう言うとなんかを放つ。

メガイエロー

「何が来たかわからないが…！私達の前には、無意味だ…！」
そう言うとなんかシールドを現れるから、何かを防御する。

ネジレ獣

「なにっ！？」

メガレッド・メガイエロー

「止めとする…！」

メガサーベルを前に構えた。

メガレッド・メガイエロー

「メガダッシュ Cutter…！」

敵を突進し、斬り付ける。

ネジレ獣

「ぐわああああ…！」

それを受けて、放電しながら、倒れたから、爆発した。

彼らは、ギャラクシーメガを下ろしたから変身解除した。

ギャラクシーメガは、銀色のオーロラが通ると、彼の謎の部屋に帰るように消えた。

エヴァ

「フン。敵が弱いなんてつまらない…」

孫悟龍は、彼女の言葉を受けてヤレヤレと肩をすくめる。

孫悟龍

「確かに。でも、油断はするな。俺達が出会う敵はどんどん強くなる。」

真剣に警告するように言う。

エヴァ

「む？分かった。それより約束はどうだった？」

孫悟龍

「分かってる。それは忘れない。」

皮肉な笑いで言うと、エヴァは、それを聞けて、フンと皮肉に鼻を鳴らすように笑い返す。

孫悟龍

「よし。エヴァ、帰る。」

孫悟龍とエヴァは、彼のログハウスに帰るように転移するとしたと、

ネジレ獣達により破壊された街を孫悟龍が、既にいつの間に復元した。

孫悟龍のログハウスの中に、彼とエヴァが居る。

エヴァは、ソファーに座ると、脚が組み込んだ。

彼は彼女が知ることと見る事がない魔方陣を描いた。

エヴァ

「なあ、鷹宏。どうして私が知らない魔方陣を描いた？」

孫悟龍

「それは、呪いを解除する魔方陣。ただし、不老不死と吸血鬼化を解除することが出来ない。」

エヴァ

「なぜ？」

彼は、呆れたように溜め息に近い響きをする

孫悟龍

「あの、前に言った時に俺もお前と同じ不老不死と闇を持つ体の事を既に持った。もし、お前の不老不死を解除するなら、俺と一緒にいる事が出来ないなんて多分間違いない。」

エヴァ

「あつ、確かに。って、いつの間にお前は、私の気持ちを分かっているか？」

最後まで言う。孫悟龍は、それを聞いたようにスルーする

孫悟龍

「完了。エヴァ、その上に立ってくれ。それと、愚かな正義どもに気付けない為に魔力を抑える指輪をはめてくれ。」

そう言いつと同時にエヴァに魔力を抑える指輪を投げ渡した。

エヴァは、頷き、この指輪をはめたからその陣へ歩いて、着いてから、彼と向き合う。

彼は、それを確認するように目を隠れてから、何かの呪文を呟いて、その目を開いて目の色が青色に変えてしまう。

彼女は、彼の目を見て、息を呑んだように目を開いた。

エヴァ

「綺麗……」

言葉を呟く

孫悟龍は、エヴァの中の呪いを見て、険しそうな顔になっている。

孫悟龍

「む？ナギの呪いが確かにあるのが、もうひとつの呪いがある……？」

エヴァ

「なんだと!？」

孫悟龍

「なぜ、ナギは、エヴァに登校地獄と言う呪いだけをかけた事が分かってたはずのが、誰かが真帆良を覆うと言う結界だけじゃなくて、

お前の魔力を抑える呪いもかけた…？」

エヴァは、だれかという言葉聞いて、ハッと気づく。

エヴァ

「もしかして！？じじい！？」

孫悟龍

「む？じじい？」

エヴァ

「近衛近右衛門、ここの学園長。まさか、私は、7年間に、気付けない。くそジジイ…いつか殺す…」
憎悪を覆われるままに言う。

孫悟龍

「さあ、この呪いを殺す…」
それを受け流せたように言う。

彼の目から見る所では、エヴァの中の呪いの死丸を見た。

孫悟龍

「……！見えた！？」
ドウッ！？と一閃する音をする。

呪いの死丸を斬ったから残さずに呪いと共に消えた。

彼女は、そのように感じた。

エヴァ

「フッフハハハハ！ナギの呪いを消えたから私の自由になった！？」

孫悟龍

「あと一つの呪いを殺したいけど、今では無理だ。エヴァ。わりい、耐えてくれ。」

苦虫を噛み潰したような顔で、謝るように言う。

エヴァは、横で頭を振る。

エヴァ

「うっん、確かにナギが言ってくれた事を分かっている。あなたはあなたのお節介のおかげで、呪いを解けてくれる事を感謝する。有難う。」

そう言うとき昔の姫のように頭を下げる。

孫悟龍

「止せ。頭を下げないでくれ。そうでもない、俺の体内がむずむずしている。」

それを聞いたエヴァはポカンと啞然する様な言う顔をしながら頭を上がっているから、クククと笑う。

エヴァ

「クククク。まさか、珍しさみたいにお前の弱点がある。」

孫悟龍

「まあ。さっきの闘いは、愚かな正義どもに見せてしまったから、愚かな正義どもに学園長に報告するかもしれない。」

エヴァ

「む？それがどうした。」

孫悟龍

「学園長を含む愚かな正義どもは、多分闇の正義である俺と悪の魔法使いであるエヴァを利用するかもしれない。」

エヴァ

「どうする。」

孫悟龍

「じゃあ、明日は、愚かな正義どもを最悪な条約にする。」

ニヤリと笑いが歪んだように悪みtainな顔で言う。

エヴァは、それを聞けて、驚愕していたから、クククと悪笑いをする。

エヴァ

「クハハハハハ！まさか、お前は、私以上の闇と悪を持つ！！」
笑うように腹を抱きながら言う。

孫悟龍

「フン。まあ、褒め言葉を貰う。」

皮肉な表情をしながら言う。

孫悟龍

「それより夜になった。」

エヴァ

「む？あつ、本当だ。」

窓の方を見て、夜になった。

孫悟龍

「お前はここに泊まっても構わない。」

エヴァ

「ふむ。それで、食事はどうする。」

孫悟龍

「え？何言っている。俺は、食事を作る。」

エヴァ

「何だと……？お前が料理することが出来る？」

孫悟龍

「もしかして、お前が俺の料理のスキルを信じられない。いつか後悔する。」

悪笑いするように言い、キッチンへ行く。

エヴァは、そんな孫悟龍を見て、ゾツとするから冷汗をした。

10分後に、彼が料理を完了した。

エヴァは、彼の料理を口へ運ぶように食べた。

エヴァ

「美味しい……」

孫悟龍

「だろう。」

エヴァ

「戸惑いしてしまつてごめん。」

孫悟龍

「それを気にしない。誰にも俺の料理の技術を信じないなんて当たり前だ。」

食事を食べながら、会話と快談をしたらエヴァはある感情に気付いた。

エヴァ

「（今の感情は…。ナギが言われたとおりに、お前は、闇を包まれたままに光へ進む。お前は、初めて私に手を差し込む。そうすれば、私も今までの闇を包まれたままに彼と共に光へ進むかもしれない。）

と固いように誓う

それを食べ終わったから、孫悟龍は、皿を洗ったり片づけたりする。エヴァは、彼がそれをする途中に彼の上着のすそを少し掴む。

孫悟龍は、エヴァのそんな行動や心情を理解しながら苦笑するからエヴァの頭を撫でている。

エヴァは、それを受けて、頬を紅潮にして、誰にも見ないように抱けながら彼の腰に俯く。

孫悟龍の部屋

孫悟龍

「俺は、寝たいけど……なぜ俺のベッドにエヴァがいる!？」

孫悟龍のベッドに彼だけじゃなくて、エヴァが居る。

エヴァ

「鷹宏、あの…、子供の頃に私の親とベッドと一緒に寝た。今は、親がいなかった。お前と一緒に寝てくれるか？」

紅潮させた頬でぬいぐるみをだっこしながら、懐かしき昔を語るから、悲しき顔で見上げる。

孫悟龍は、エヴァのそんな顔を見て、諦めたような溜息をする。

孫悟龍

「しょうがない。俺のベッドに俺と寝る。」

エヴァは、それを聞けて、見上げる。

エヴァ

「本当だ？」

孫悟龍

「本当。俺を甘えてもかまわない。」

エヴァ

「ありがとう／＼／＼／＼／」

と恥ずかしいように紅潮させた頬で礼を言う。

孫悟龍

「エヴァ、お休み」

安心する様な優しさで言う。

エヴァ

「鷹宏、お休み。」

エヴァは、安心するような寝息をする。

孫悟龍は、それを見て、クスと微笑するから天井を険しそうになつて見る。

孫悟龍

「……もしかして、ネジレ獣だけじゃなくて、仮面ライダーの敵な^{殺す}ども俺を消す事だけじゃなくて世界樹を利用にする事を目的にするために現れるかもしれない。」

険しそうな顔で呟きながら、窓で世界樹の所に向けてチラッと眼だけが見る。

彼の呟きを、現実をする事になっている。

第二話「600年の吸血鬼の少女と邂逅・解呪・模擬戦／スーパー戦隊・仮面が

次回

赤のツインテール髪の少女は、闇の異端者、蒼髪の青年に再会する。

アスナ

「鷹宏兄さん！？久し振り！」

孫悟龍

「お前達みたいな愚かな正義魔法使い共は、俺達を利用するみたい
にここを人質にする事を脅迫するか？それが正義魔法使いのやり方
？それに魔法という兵器の危険を知らないか？」

アスナは、愚かな正義魔法使い共を嫌悪するに睨んだ。

アスナ

「嫌い！？おまえたちみたいな正義で語る魔法使いが大嫌い！私の
意思を無視したように私の記憶を勝手に消えてくれる！？もし、鷹
宏兄さんがくれたものを持たないから、お前達が私の過去の記憶を
多分、消えてくれる！！！？だから！！私は、正義を語るべき魔法
使いであるお前達が大嫌い！！？」

愚かな正義魔法使い達と学園長が、蒼髪の青年と契約について話し
合う。

孫悟龍

「断る。契約をしたなら、お前たちみたいな人が持つ愚かな欲望と理想は俺達を利用するように押しつけられる。俺達は、お前達の正義と違うようで、自分の利用だけじゃなくて自分の命でも人の命でも守る事をするのが出来ない所がある。懺悔などに背負うままに自分は、歩くのを止まらない。お前達は、英雄になってほしい？無意味だ。」

正義どもは、納得できない。タカミチは、俺に模擬戦をする。

孫悟龍

「フン。まあ、お前達の魔法使いの力と俺の科学と気や魔力の実力の差を見る！！俺に挑戦するなんて後悔する！？」

第三話 再会と嫌悪と襲撃

第3話 再会と嫌悪と襲撃

朝、孫悟龍は、先に起きて、エヴァに自分の腕を抱かれたのを抜いたから、修行ジャケットを着れて、いつもの修行をする。それを終わったら、汗とその臭いを払うようにシャワーをする。

孫悟龍は、このジャケットじゃなくて上着とズボンを着替えたから、シャワーの水が残った髪を払うようにタオルを使う。

孫悟龍

「ふっ。やっぱり修行の後に、シャワーを使えるなんて気持ちいいだ。」

気持ち良さそうに言う。

コンコンと包丁は、まな板を叩いたような響きをする。

彼は、鼻歌をしながら、朝食を作る。

既に作ったら机にそれを運ぶように置く。白米とみそ汁と焼き魚を。

エヴァは、起きたら眠そうに瞼を擦る。

エヴァ

「鷹宏、おはよう」

寝癖みたいにボサボサになった

孫悟龍

「む。わあ、髪をボサボサになっていた。」

そんなエヴァを見て、苦笑する。

孫悟龍

「まあ、俺が、清潔になってあげる。」

いつのまに櫛を取り出す。

ソファアを孫悟龍が座った。

孫悟龍

「さあ、お嬢様、ソファアを座ってくれ。」

優しそうみたいな執事の言葉を言い、頷いたエヴァも彼の隣に座った。

孫悟龍は、エヴァの髪を梳とく。エヴァは、それを受けたようすで気持ち良さそうにする。

孫悟龍

「よしとする。エヴァ、朝食を冷えないに早く食べる。」
と家族みたいな笑顔で言う。

エヴァは、頷くと、椅子にかける。

孫悟龍も椅子にかける。

孫悟龍・エヴァ

「「いただきます。」」

孫悟龍とエヴァは、食事を終えたから、片付ける。

午前7時40分で、彼達は、自分の学校の制服を着替えるから、家の鍵をかけてから出るから遅刻しないために真帆良男子校高等学校と真帆良女子校中学校の玄関まで走る。その前に孫悟龍が、魔法使いの偽善者共に気付けない為にエヴァの魔力にリミッターをかけた。

二人は、走りながら話し合いする

エヴァ

「なあ、お前も学校へ行くか？」

孫悟龍

「ん、ええ。俺は、高等部2年の生徒になった。ほら、学生証。」「ポケットから学生証をエヴァに見せるように取り出す。」

エヴァ

「本当…どうして学校に通うか？」

孫悟龍

「さあ？俺は、お前が通った学園の先生になる為に学校を通う。」

エヴァ

「何！？将来は、私が通った学園の先生になる！？」

孫悟龍

「もしかして、お前は、俺の授業をしたい？」

からかいに言う。

エヴァ

「む／＼／＼／＼。私は、鷹宏の授業をしたい。」
胸の前にモジモジとする手がした。

孫悟龍

「（はあ、やはりお前は、俺を好きになってしまった。まあ、いい。）まあ、俺は、確かに将来の裏がある。」
そんなエヴァを見て、俺がした事を自覚にさせたから、言う。

エヴァ

「なに？将来の裏？」

孫悟龍

「ええ。俺は、誰にも正義バカにも知らない秘匿の事件で本当の真実を探る。それにここもおかしいと感じたなら、今からここを調べると思った。」

エヴァは、それを聞けて、驚愕したように目を開けた。

エヴァ

「ホント……？」

孫悟龍

「ええ。我が親友、ナギの死でも魔法大戦でもおかしかった。」

エヴァ

「なに？ナギは死んだじゃない……」

孫悟龍

「ええ、ここに来た前に、ナギの死の事を聞けて、ラカンと出会ったら、ナギが生きているのが確認していた。ラカンは、ナギと契約した自分のアーティファクトを使えたってナギがどこか生きた。」

エヴァ

「そうか…」

ナギが生きた事を安堵するように目が閉ざした。

孫悟龍

「もしかして、誰かが千の英雄、ナギを利用したから、誰かと共に封印した。」

エヴァ

「……な……に……?」

孫悟龍

「……まだまだ調べることがある。じゃあね、放課後で会おう。」

エヴァ

「ふむ。分かった。放課後で。」

孫悟龍は、高等部へ行く。エヴァも中学部へ行く。

学校

昼休みの時間で孫悟龍は、一人で昼ごはんを食べるとするが、誰かが俺の事を大きな声で呼ぶ。

????

「悟龍兄さん……!!!!」

孫悟龍

「む？」

大きな声をする所に振り返っている。

赤い髪ツインテールと緑色と青色のオッドアイの目の小学生ぐらいの少女が、こっちの所に走ってくる。

彼は、あの少女を見て、驚愕した。

孫悟龍

「アスナ!？」

少女の名前を呼ぶ。

アスナ

「悟龍兄さん、久しぶり!!」

出会いのように言い、抱き上がる。

彼は迅速に弁当を大切にするように避けて、抱き上がった少女を受け止める。

孫悟龍

「アスナ、久しぶり!!元気だ？」

アスナ

「うん!悟龍兄さん!元気だ!!」

孫悟龍

「そうか…」

その瞬間に、魔法使いでも優秀な魔法使いでも気付けないように盗み聞き・盗撮妨害封時結界を張った。

孫悟龍

「それで、アスナ、魔法アホ共は、お前の昔で苦しめた記憶を消した？」

アスナは、否定するように横で正義の事を聞けるように嫌そうな顔を振り込む。

アスナ

「大丈夫…お前がくれたネックレスのお陰で記憶の魔法を拒否した。」

腕に付けられたネックレスをギュッと抱きながら言うから昔を思い浮かべる。

ガトウにやられた後に、タカミチを含む正義魔法使いがアスナに過去の記憶を封印する魔法をかけた時、この魔法を拒むようにアスナの腕をかけた彼女の腕に似合うサイズのエメラルドな結晶型のネックレスが光る。

タカミチ達は、アスナの腕がかけたエメラルドのネックレスを無理矢理に外すのが、誰もが外す事が出来ない。これが出来ないから悔しいように過去の記憶を封印する魔法の事を諦めた。ネックレスを外す事が出来る人は一人だ。そう、それが孫悟龍だ。

孫悟龍

「そうか…良かった。今までは、お前は正義バカ共が嫌い？」

アスナは賛同するようにコクツと頷いた。

孫悟龍

「じゃあ、俺と共に行くか？」

アスナは、彼の言葉を聞けて、驚愕していた。

アスナ

「…ホント？」

孫悟龍

「ああ。その前に覚悟するか？」

アスナ

「覚悟？」

孫悟龍

「俺達と共に居るなら多分殺し合いするように戦場へ行く。生きたいなら、俺と共に自分を守るように特訓をして戦場で殺し合う。俺達と共に生きるか？そのままに生きるか？」

アスナ

「私は、鷹宏兄さん達と共に生きたい！例えば、お前の敵が居る時に、鷹宏兄さんの敵は私達の敵だ！？そして、鷹宏兄さんたちと生きる為に守り抜く！！」

そう言ったアスナの目は凄く澄んでいた。

孫悟龍

「フフ、ハハハ。やはり気に入った！！お前の目が気に入った。アスナ！！」

アスナ

「はい!!」

孫悟龍

「お前は、今から我々、不死鳥の騎士隊の二人目の仲間だ!!」
アスナに自分の手を差し出す。

アスナ

「——!!はい!!」

エヴァと同じようにアスナの心に渦巻くのは自身に制御できない程の狂おしい——歓喜。言葉も出ないほどの歓喜に突き動かされたから、自分の小さな手が孫悟龍の手を握る。

孫悟龍は、それを見て、アスナの心境に気付けた。

孫悟龍

「（ふ〜ん、やはりおまえもエヴァの心境と似ていた。それにアスナは、俺の事が好きになったのは多分ナギとアリカと居た頃から俺の事を好きになっていたかもしれない?）」

孫悟龍の考えが現実になるのは、彼が知らない。

孫悟龍

「よし……続きは弁当を食べる。」

アスナ

「あの…」

孫悟龍

「む？」

アスナ

「私は、鷹宏兄さんと一緒に昼ご飯を食べてもいいか？」

孫悟龍

「いい。俺は、一人でも二人でもみんなでも一緒に食べる方が良い。」

「

孫悟龍

「そうそう。ここで、俺の真名を呼ばせてくれないか？」

アスナ

「どうして？……はっ。確かにそうだ…私がお前の真名を呼んだから、誰にもバレるかもしれない。分かった。仲間がいる時と二人にする時には、真名を呼ぶ。」

孫悟龍は、アスナの言葉を聞けて、構わないと答えたが、ただし、話す時には俺の結界のように張る方が良いと警告するように言う。アスナは、それに頷いた。

放課後

アスナは、高等部の玄関で彼が来るのを待った。

彼がいる気配に気付けたから彼が居たのに振り返って、彼を見たなら少女は、顔を緩んだ。

孫悟龍

「いよお、待ってた、アスナ。」

アスナ

「うん。」

孫悟龍

「さあ、俺の仲間が居る所に行く。」

アスナ

「はい。」

孫悟龍はアスナと一緒に歩く。

世界樹でエヴァが待った。

孫悟龍は、世界樹に到着する前に誰か俺達の事を見る事に気付けたから、防音・人払い・盗撮妨害の封時結界を張る。

孫悟龍とアスナは世界樹でエヴァと合流した。

アスナと合流した前にエヴァは、孫悟龍から昼でのアスナの事を念話盗聴妨害の念話で話されて、驚愕したから冷静に戻って、孫悟龍と同じな念話で話す。

エヴァとアスナは、紹介し合いした。

孫悟龍

「さあ、ここで集合する意味が分かるか？」

エヴァとアスナは、しっかり頭を横で振るう。

孫悟龍

「そうか…教えてやる、俺の目的を。」

エヴァ

「なに？お前は目的を持つか？」

孫悟龍

「ええ。俺の目的は、一つ、魔法世界戦争の本当の真実に諸君をすべて話す。二つ、俺が気に入った人を仲間にする。三つ、地球侵略する事などを持つ化け物達を撃退する。……そして、四つ、赤き翼、わが友、ナギと仲間達を利用するMM連合上層部を容赦なく潰せる。」

アスナとエヴァは、それを聞けて、目を開いたように驚愕していた。

エヴァ

「なに……？なぜMM連合上層部ゴミはナギさん達を利用するか？」

孫悟龍

「はい。アリカの昔の話をしっかり聞けたから、その中に引っ掛かりがある。」

アスナ

「はっ…なるほど、昔、連合上層部は、戦争で魔法無効化という能力を持つ私という物を利用したから、帝国の攻撃を無効するように

結界を張った。」

孫悟龍

「その通りだ。連合上層部は、あなたを無理矢理に魔法無効化を出るように苦しめた。」

エヴァ

「……なに……に……？」

アスナに振り返って見て、彼女は、アスナが自分の苦しみと似ている事を感じた。

アスナ

「でも、お前は、ここまで真実を調べた……？」

孫悟龍

「実は、魔法世界で赤き翼の仲間、詠春の弟子、クルトと話した。盗聴でも誰にも聞こえない結界を張ったから、魔法戦争の真実を聞けて、少し纏めた事が出来た。でも、真実がまだ足りない。」

アスナ

「なに……？クルトさんが、珍しさに鷹宏兄さんと話した……」

孫悟龍

「ああ、俺は、クルトが赤き翼のやり方を気に食わなかったはずなのに彼の凄い覚悟が気に入った。俺とクルトは、しっかり真実の事で相談する。クルトは、連合上層部の悪事の真実を聞けて、驚愕したから連合上層部への怒りを覚えた。ナギとアリカの為に俺と親友になった。」

孫悟龍の目的の説明を語れるから、アスナもエヴァもそれを認めた

ように受け入れた。

.....
.....
.....

結界を解除したから、孫悟龍は、はじめから自分が張った結界の外に屑の魔法使い達がたくさん居た事に気付けた。

孫悟龍

「おい、最初にいいかげんに出る。」

ぞろぞろ隠れるところから出た。

学園長

「.....お前は、良く私達の気配に気付けた。」

孫悟龍

「フン、俺の軽い基礎で気配を取るなんて当たり前だ。」

眼鏡をかけた黒人の男性——ガンドルフィーニが前に一歩出た。

ガンドルフィーニ

「なぜ！！お前は、一般者はずなのに結界魔法を使えるなんて何者！！それなのに悪い魔法使いと一緒に歩く！！」

孫悟龍

「フン。愚かな正義という仮面をつけたお前達が俺を知る必要がない。」

ガンドルフイーニ

「……！！お前は、魔法を持ったので立派な魔法使いにならなくていいか！？」

孫悟龍は、立派な魔法使いという言葉聞いて、嫌な顔になって殺気を抽出する声をする。

孫悟龍

「黙れ……」

魔法使い達

『つつ……！……！』

孫悟龍

「お前達は、俺に英雄を求める？はん、バカバカらしい。英雄では、一番の殺戮者に押し付けられる重荷みたいな物。誰を英雄呼ばわりするなんて名乗る物じゃない。完璧？無敵？万能？はんつ、お前達は、英雄に助けない人がいるのを知らない所で、絶対に英雄という人物に憎悪される事になった現実を受け入れたくないから正義という麻薬に酔われたままに愚かな理想と欲望を抱けて溺死する。現実を受け入れられないお前達が居るなら、お前達が望んだ平和を地獄に変えて、歪んだみたいに平和になつて堕ちる。一般者から英雄がない平和が望む人がたくさんいる。」

孫悟龍

「それにお前達が住んだこの結界の魔力が小さすぎた。お前達愚かな正義な魔法使いが居た所為でお前達関東の魔法使いを憎悪した関西の呪術師達が侵入しやすかったから普通の人たちを襲いやすいようにする。もしかして、わざと結界が小さかったからその人達が

侵入しやすいように普通の人たちを巻き込んだ。魔法にバレた普通の人々が、それに気付けたお前達魔法使いによつて魔法に關した記憶を削除したけど、無意味だ。既に頭じゃなくて、体だけでその危険のことを変わらない人は、間違いなく死ぬ。それが本当の正義魔法使いのルールだ……。お前達がここにいないなら、普通の平和をした人達は、普通の平和を得ることが出来た。今のは、お前達正義魔法使いがいるのが目障りだ。」

タカミチ

「僕達はそんな事ではない！！アスナちゃん！！彼はナギさんと親友になったはずなのに、僕達正義を侮辱するから彼は悪みみたいな言葉をした！！彼から離れてくれ！！」

アスナは、ナギとアリカと私が、孫悟龍との出会いでは、初めは、確かに警告したけど、彼に包まれた雰囲気は、私より悲しいのが魔法無効化という能力を持つ私の雰囲気と似ているようだ。それだけじゃなくて、彼は、アリカとナギの昔の物語をすっかり聞けてくれたからアリカとナギを苦しそうに見た。彼は、人が苦しい事を心配するによつて誰よりも優しい奴なんて初めてだ。彼の正体はどんな人間かはわからないけど、少なくとも昔からはアスナの味方で居てくれる。と思う。

初めからアスナを今まで魔法使い共は人形と扱いする行動をしたけど、彼と出会ってから彼からは人形じゃなくてヒトとして扱ってくれる。

彼なら信じるほうは決まっている。

と、孫悟龍の後ろ……タカミチと反対側に隠れるから孫悟龍の袖を優しくそくに掴む。

タカミチ

「っ！？あ、アスナちゃん！？どうしてそっち…」わ、私は！！！
私は貴方たち魔法使いが嫌い！！」「っ！？」

タカミチが驚いている

私が隠れている孫悟龍もしっかり聞きながら冷静な表情をしている。
エヴァも同様だ。

アスナ

「私は魔法使いなんか大嫌い！！立派な魔法使いなんていう仮面を
使って、正義という言葉振りかざして、自分たちの思うようにし
ていく正義を語る魔法使いは、その中でも1番嫌い！！」

アスナ

「私が今までどんな風に生きてきたか知ってるでしょ？私の魔力が
危険だから！私の魔法を無効化してしまう体質が危険だから！だか
ら私を監禁して封じ込めてたのは貴方たち魔法使いだ！！」

タカミチ

「っ！？だから魔法でその悲しい記憶を消し…」うるさあああああ
ああああい！！」「っ！？」

アスナ

「私の人生は確かに今まで幸福なんて呼べるモノじゃなかった！で
もこんな人生でも、私が唯一持つているモノなの！私が持つて
るのは名前と、この記憶しかないのに！それさえ奪おうとするの！？私
はもうモノ扱いされるなんて嫌！タカミチたち、魔法使いさん達
で私のモノを奪おうとする！もし、悟龍兄さんがくれたものを持
たないなら、お前達が私の過去の記憶を多分、消えてくれる！！？？

タカミチ

「ナギさんは、そんなことをしない！！なあ！アスナちゃん！ナギは、自分の事を英雄呼ばわりした！！」

アスナ

「ひつく。……ナギさんは、確かに魔法大戦で千の魔法の男と言う英雄の名を嬉しく貰えただけから魔法大戦後で一度も自分から英雄と呼ばないように自分の事を呼ぶ。それにお前達は、正義に酔われたままだにナギさんの事を英雄の名を呼ぶだけの事をした。しかし、ナギは、英雄の本当の意味を知らなかった。悟龍は、本当の意味を教える。もし、ナギさんがいるなら、お前達が英雄を呼ぶから、自分は、絶対に困惑になった。」

エヴァ

「……確かに、私からナギと再び出会えて、決闘するけど、その前にナギの英雄の名前を呼んだからナギは、英雄の名を聞いたら、内心で苦噛みするような表情になりながら、しょうがなくそれを隠れるように冷静な顔で言い返した。私に登校地獄という呪いをかけたから、ナギは、私に聞こえない言葉をする。ナギが「ごめん。お前の気持ちと都合を分らないように呪いをかけてしまった事を。」と謝罪した。」

ふっ、やはり誰よりも闇でも光でも優しさを持つ孫悟龍がいるなら、絶対に周りの人が変わるかもしれない。ナギも孫悟龍と親友になったせいで変わった。」

タカミチ達は、それを聞けて、ショックを受けたように驚愕した。

孫悟龍

「更になると、英雄と呼ばれた人は、魔法世界だけじゃなくて地球も勝手に戦争を進んでいたから、まちがいなく、軍隊から英雄と呼ば

れた人は、戦後A級戦犯になったと決めたかもしれない。それに最初からここで正義でも悪でも存在しない。」

ガンドルフィーニ

「黙れ！！黙れ！！！！黙れ——！！！！！」

孫悟龍は、ガンドルの言葉を聞いて、険しい顔になった。

ガンドルフィーニ

「やっぱり！！お前達は、俺達の正義を侮辱する！悪の魔法使いだ！！そして、アスナを救う！やれ！！魔法使い共！！」

魔法使いを除く正義を盲信した魔法使い共

[illegible]

学園長

「むっ！！いかない！！止せ！！みんな！！」

孫悟龍の言葉を理解して、焦りに制止する声をする。

魔法使い共は、既に学園長の制止する声を聞こえないように彼らを襲う。

孫悟龍は、それを見て、呆れたような溜息をする。

孫悟龍

「はあ。やはり正義を妄信した魔法使い共は愚かだ。お前達は、話を通じるのは、無理だけど、無理矢理に暴力をする。これは正義に似合わない。それに俺の実力を知らないから俺に挑戦するなんて絶対に後悔する。エヴァ、アスナを頼む。」

エヴァは、それを聞いて、頷いたからアスナを守るために構える。
エヴァとアスナは、孫悟龍の強さを知っているから孫悟龍が勝つの
を信じる。

孫悟龍は、前に一步を出て、冷静に余裕そうに構える。それと同時
に人払いなどの結界を張った。

孫悟龍

「まあ、お前達が憧れた英雄達の技を見せてあげる。」

タカミチ

「……なに？」

孫悟龍

「ふっ!!」

ポケットに手を入れる構えで大砲のように拳を打てる。

愚かな正義魔法使い

「……………うわああああああ!!」
それを受けたように吹っ飛ばれた。

タカミチ

「なっ!!それは、僕でも僕の師匠でも感卦法で使ってきた豪殺居
合拳!!なぜお前は、感卦法を使わずに豪殺居合拳を使用した!？」

孫悟龍

「次に…ふんっ!!」

腕に気エネルギーを凄く溜めたから打てる。

愚かな魔法使い

「「「「「「「「ぐわあああああああ！！！！」」「」「」「」」

タカミチ

「次にラカンの羅漢パンチも……！！」

孫悟龍

「さらに次は……」

いつの間に剣を持つから、既に剣に電気エネルギーを溜め込んだ。

タカミチ

「この技は……！！」

孫悟龍

「雷光剣……」

振った剣から電気エネルギーを帯電させて爆発させ、広範囲を破壊する。

愚かな魔法使い

「「「「「「「「ぐがあああああああ！！！！」」「」「」「」」

タカミチ

「バカな……師匠にラカンさんに……そして詠春さんの技も使用する。」

孫悟龍

「次は……」

上へ跳び上がり、三人を分身した。

孫悟龍（分身１）

「無詠唱！！燃える天空！！」

標的に一定の空間内に超高温の炎を発生する。

孫悟龍（分身2）

「無詠唱！！重力魔法！！」

標的に一体の空間内に重力50倍を発生する。

孫悟龍（本体）

「無詠唱！！千の雷！！」

標的に無数の雷を放つ。

ガンドルフィー二達

「……………なっ！！ぐわあああああああああ

あああああ！！」……………」

3人が放した魔法が混じったから凄く爆発したから煙と衝撃波を舞い上がった。

学園長

「うぬ！！」

タカミチ

「くっ！！」

エヴァは、タカミチ達と同様に孫後龍がナギ達の技を使用することを驚愕しながら自分とアスナを守るために魔法の楯を張る。

アスナは、昔、ナギとの戦いのことで見てから慣れたから感心したように目が輝ける。

それを収まるから、愚かな魔法使い達は、すべて気絶する。

孫悟龍は、分身を解きながら、ゆっくりと着陸するように空を降り

る。

タカミチ

「そんなバカな……アルさんの技もナギさんの技もゼクトさんの技まで使用した……それに上位古代魔法まで無詠唱で使用できた。」

孫悟龍

「安心する。俺は、今回だけでは手加減したからあなた達を見逃すけど、次は、俺と俺の仲間に手を出す場合は、今度として容赦しない……………」

安心するように言った途中に、本気で冷徹な雰囲気で言い変わった。タカミチと学園長は、それを受けて、冷や汗をしながら、引き下げる。

孫悟龍

「そうそう、悪いことを言い忘れた。俺も、お前達が俺のことを対策するようにどんな呪いを掛けられる魔法が効かない能力と魔法を切断するような能力とアスナと同じな完全魔法無効化という能力を持った。ただし、誰かが俺を変化する事はできない。もし、俺を本物のように変化する者は、俺の中に誰でもエヴァでも超える闇に耐える事ができないなら、闇に堕ちるように心身とともに死ぬ。それに俺は、人の気持ちや都合と周りを考えないように軽い覚悟や歪む正義や正義という妄信を持つ魔法使い共が嫌悪するように嫌い。それ以外の人を普通みたいにする。」

孫悟龍

「それに、昔に俺は、千の英雄の男、ナギと戦ったからナギは本気を出したはずなのに、俺は本気に出せずに勝った。」

タカミチと学園長は、息を呑んだように驚愕した。

孫悟龍

「交渉する。そうしないと、さっきのように容赦ない。」

学園長

「分かった。交渉は何か？」

孫悟龍

「さあ、一つは、お前達の都合は、俺達の都合と関係ない。二つは、俺たちを絶対に監視しない。三つは、絶対に俺達の事を上層部に報告くれない事。……そして、四つは、俺だけが認めるまでに、俺達に答えられないことは答えない所やログハウスに入る事を禁止する所がある。もし、お前達は、一つでも破れたなら、容赦なくここを潰せる。」

学園長は、反論する言葉を見つからないように呻きながら、考える。もし、受け入れられないなら、孫後龍は、確かに容赦なくここを破壊するかもしれない。しょうがなく、方法は一つ……受け入れる事をすると思う。

学園長

「分かった……お前達の交渉を受け入れる・・・」

孫悟龍

「そうか…それはここまで。おっと、目覚めたお客さんが来た。」

孫悟龍が不敵に笑ったように左へ振り返ったから彼の攻撃を受けたガンドルフィーニと魔法使いがずいぶん立ち上がる。

ガンドルフイーニ

「お、おのれ！！悪い魔法使い共め！！それで潰せ！！」
そう言うと同時にガイアメモリを取り出す。

彼らの肉体にそれを挿入した氷河の記憶、アイスエイジドーパントとマグマドーパントへ変身させ、氷河系マンモスヤミーをどこから現れる。

学園長とタカミチは、それを見て、驚愕した。

学園長

「それは何なんだ！？」

孫悟龍

「へーえ、やつぱりお前達は、正義を求めるためにガイアメモリの力を使おう。しかし、愚かだ。正義を歪んだお前達はガイアメモリを使った後に力を求めるという欲望のパワーに取り入れるからお前達の精神をダメージされる事を知らない。それにヤミーの親は、黒い人の欲望だ。フン…エヴァ…あれを使おう。」

と言いながら中指が上に掲げると、防音・人払いなどの結界を展開する。

エヴァも領けて、エターナルメモリとロストドライバーを取り出すから腰に巻き付ける。

アスナ

「悟龍兄さん！！私もやる！！」

孫悟龍

「ふっ、お前がそう言うのが来ると思う。いいだ。アスナもこれを

使おう。」

アクセルドライバーとアクセルメモリをアスナに投げ渡せた。

アスナ

「はい！！私は、お前達を守る！！」

それを受け取るから腰に巻き付ける。

孫悟龍は、それを聞けて、フツと微笑するから、オーズドライバーを取り出して、腰部へと近付けると、自動的にベルトが現れ、腰に装着される。

懐からさらに取り出した3枚のコアメダルをオーカテドラルへと入れ、傾ける。

同時に、右腰部に装着されているオースキヤナーを取り、オーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『タカ、トラ、バツタ。タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ』

エヴァがEの文字が入った白いメモリのスイッチを入れる。

『ETERNAL！』

アスナがAの文字が入った赤いメモリのスイッチを入れる。

『ACCEL！』

三人

「『変身!!』」

エヴァは、エターナルメモリをロストドライバーに挿入し、傾げる。アスナはアクセルドライバーにアクセルメモリを挿入してパワースロットルを捻る。

直後、孫悟龍の周囲を巨大なメダルの様な形をしたものが覆い、仮面ライダーオーズ（タトバ）へと変身した。

『ETERNAL!!』

エヴァは、アルファベットのEを横倒しにした（つまり山型の）触角を持ち、左右の目頭がつながり「∞（無限）」のようになって、腕とアンクレットには青色の炎が刻印されているほか、胸・右腕・左腿・背中には合計25のマキシマムスロットが設けられたベルト・コンバットベルトが装着されて、あらゆる攻撃を無効化する黒いマント・エターナルローブをまとっている『仮面ライダーエターナル』へと変身させた。それを変身完了したと同時に、風が巻き起こり、青い炎が上がる。

『ACCEL!!』

アスナは、鋭利な形状となった「A」の文字が頭部に見られる。モチーフはオンロードバイクで、フルフェイス・ヘルメットのようなマスクと、背部・脚部に装着された車輪の仮面ライダー、『仮面ライダーアクセル』へと変身させた。変身直後にシールドの奥に隠された青い円状の複眼は発光する。

アクセル

「この歌、なんだ？」

オーズ

「歌を気にいなくていい。それより敵を倒すことに集中する。」

アクセルは、言葉を聞けて、化け物に振り返って、襲われる化け物の攻撃をかける。

オーズとアクセルとエターナルは冷静に攻撃を避け込む。

オーズ

「エターナルは、マグマドーパントを、アクセルは、アイスエイジドーパントを、俺は、マンモスヤミーを相手にする。」

エターナルとアクセルは、オーズの言葉を聞けて、頷いたから、言葉通りにする。

マグマドーパント

「悪の魔法使い、正義最強の俺様に挑戦するなんて後悔する！！」

エターナル

「フン。正義だけを考えて、周りに気付けずに人を苦しめる本当の気持ちを知らない。堕ちろ正義者！！」
と同時に襲い掛け合います。

アイスエイジドーパント

「貴女を倒せるからこちら側に引き込む！！」

アクセル

「……確かに自分の正義を間違えないようにする愚かな魔法使いが居る…歪んだ正義達はアホ。」

言い終わったと同時にいつの間にエンジンプレートを持つようになる。

マンモスヤミー

「悪い人、潰せ!!」

オーズ

「フン、お前は危険に強そうなやつだ。久しぶりに闘争心で燃える。」

エターナルVSマグマドールパント――

マグマドールパントは、エターナルへと、炎を連続に放つ。

エターナルは、凄いテクニックで避け込みながら、どんどん接近に行く。

マグマドールパントは、それを見て、焦りにするように次の攻撃をするが…エターナルは、青き炎を纏った右手を突き上げる。

マグマドールパント

「ぐわぁ!!」

それを受けたように火花を起こす。

マグマドーパント

「この・・・程度でええ！」

エターナル

「・・・・・・・・つふう！」

マグマはエターナルに殴りかかるがエターナルはロープで上半身を隠しながら殴りかかるマグマにカウンターからのラッシュを叩きこんでいく。

そしてエターナルは右手にコンバットナイフ型武器、エターナルエツジを手にし・・・・。

エターナル

「そりゃあああああ！」

マグマドーパント

「ぬあああああああ！」

ロープにより隠されたエツジによりマグマを切り裂く。

そしてそのままロープを翻し、正面蹴りでマグマから間合いを取る。

エターナルは、マグマドーパントを押さえるように、追撃をする。

マグマドーパント

「何故！？俺様正義は、お前みたいな悪い魔法使いに押される！！」
押さえられるように捌きながら、悪態に大きな声で叫ぶ。

エターナル

「ふん。孫悟龍は、あなた達が自分で間違えないように考える正義と違うように私みたいな悪い魔法使いを悪い呼ばわりにしないでくれた。同じ人間と扱われるなんて初めて嬉しい。私は、孫悟龍達と共に闇に包まれたままに光を掴むように歩くと決めた!!」

と追撃をしながら言うと同時に、吹っ飛ぶように強く突き上げる。

マグマドーパント

「ぐわあ!?!」

それを受けたように吹っ飛ばれた。

アクセルVSアイスエイジドーパント

アイスエイジドーパントは、凍りのような波動を放つ。

アクセルは、それを避けながら、接近する。

アクセル

「ふっ!」

強く振るう。

アイスエイジドーパント

「うわぁ!」

それを受けたように火花を起こす。

アイスエイジドーパント

「くっ!!なんて力だ!」

アクセルは、呆れ混じりのため息をする。

アクセル

「やはり口だけは一人前だ。弱い……」

と同時に、エンジンメモリをアクセルプレートに挿入する。

アイスエイジドーパント

「なんだと!?!」

弱いという言葉聞いて、怒りで凍りの波動を連続に放つとする。

アクセルは、アイスエイジドーパントの行動に気付いて、呆れたように躲しながら、グリップを引いた。

『ENGINE!JET!』

アクセル

「はあっ!?!」

切っ先からエネルギー弾を猛スピードで発射し、アイスエイジドーパントに命中した。

アイスエイジドーパント

「ぐわあ!?!」

それを受けたように吹っ飛ばれた。

吹っ飛ばれたから合流する二人は、何度も転がる。

アクセルとエターナルも合流する。

マグマドーパント

「己!?!なぜなぜお前達に押さえ込む!!俺達は、正義最強なのに

……!?!」

エターナル

「…フン。お前達は、努力をせずに自分を誰より最強を持つと自信するなんて愚かだ。トドメ。」

と同時にアクセルが同調に頷くから、エターナルメモリを取り出して、いつの間にエッジを取り出してその柄に挿入する。

『ETERNAL・Maximum Drive!!』

マグマドープアント

「なぜ…！？私達が動けない……！？」

アイスエイジドープアント

「ぐっ……！！こんな力がある……！！」

マグマドープアントとアイスエイジドープアントは、呻くように苦しみ出す。

エターナル

「ククク！驚きだ…！やはり私にこれが似合う……！！」

『ACCELE・Maximum Drive!!』

アクセル

「エターナル、私と一緒に…」

エターナル

「はん！良い！」

アクセルとエターナルは、走り出す。

そしてエターナルは、青き炎を右足に纏いマグマにキック版エターナルレクイエムを叩き込み、アクセルは、全身に高熱を纏いアイスエイジに後ろ飛び回し蹴り——アクセルグランツァーを叩き込む。

そしてエターナルはアクセルと同じに着地し二人は背を向けエターナルは右手でサムズダウン、アクセルは後ろの二体言い放つ。

エターナルとアクセル

「「さあ………」」

エターナル

「地獄を……、楽しみな！」

アクセル

「絶望がお前達のゴールだ！」

その途端マグマとアイスエイジは爆発し、後の愚かな正義魔法使いも衰弱や失神などの後遺症で倒れた。

エターナル

「……………終わったか。」

アクセル

「……………ああ。」

エターナルとアクセルは変身を解く。

エヴァ

「鷹宏が気になってる。」

アスナ

「……ああ。」

鷹宏を気になっているように思うからオーズの所へ行く。

オーズVSマンモスヤミー――

オーズ

「はっ！はっ！」

トラクロード、マンモスヤミーを何度も斬り裂く。

マンモスヤミーは、それを受けたが、鋼鉄が固めたように立つ。

オーズ

「フッ！！」

強そうに斬り裂くが、マンモスヤミーも、カウンター気味にする。

オーズ

「ぐわあ！！」

完全なグリッド形態のガメルの一撃を受けたように凄く吹っ飛ばれて、何度も転がるから、よろよろと立ち上がりながら距離からとる。

オーズ

「……いてて、完全体のガメルの一撃より強い。やはりお前は『無属性の氷河系ヤミー……！こちら氷河系コンボを使用する……！』」

そう同時に、自動的にオーメダルネストから水色のコアメダル3枚を取り出すから、オーカテドラルへと入れ、傾ける。

同時に、迅速に右腰部に装着されているオースキャナーを取り、オ
ーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャン
させていく。

『ダイアウルフ！スミロドン！マンモス！ダイロダイロ！ダイロモ
ス！』

水色を輝き、氷河を支配する王が降臨する。

恐竜コンボの固有能力以上に全身から河川などを凍結させるほどの
強力な冷線「ダイアオディアス」を放し、マンモスヤミーに氷漬け
する。

オーズ（ダイロモス）

「うおおおおおおお！！！」

衝撃波を飛ばすように狼の大吠えをする。

マンモスヤミーは、それを受けたように火花を起こしながら少し吹
っ飛ばれた。

オーズ（ダイロモス）

「……っ！！（でも……！オーズには、恐竜系より氷河系コンボの
負担が大きすぎるからオーズの制御限界は1分……！！暴走を始める
前に早く済ます……！）」

オーズの限界を大きすぎた『無』コンボの負担で感じて、思うと同
時にもう一度に右腰部に装着されているオースキャナーを取り、オ
ーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャン
させていく。

『Triple! scanning charge!!』

そう電子音をすると同時に、全身を輝やかせつつ、冷気みたいな波動でマンモスヤミーを凍らせる。

オーズ（ダイロモス）

「おりゃああああああ!!」

オーズの前に前方に出現したアイス色の3つのリングを潜り抜け急接近し、スミロドンクローでX字に凍らせたマンモスヤミーを粉砕するように切り裂くフリーザクロスを決める。

爆発したから、大量のセルメダルに戻る。それが終わったら、オーズが変身を強制解除する。

孫悟龍

「はあ……はあ……はあ、くそ、やはりそのコンボの負担をオーズに耐えられた事が出来ない。俺は、あれを使用する。でも、あれに認められないと暴走をするかもしれない……はあ。それにこいつらの決闘を終わった。」

恐竜と同じ『無』のコアメダルの大きすぎる負担がオーズに耐えられる事が出来ないように、膝に地面を着く。

座り続けると、疲労と負担を少しずつ回復するなら呼吸を平然に戻ることができる。

エヴァとアスナは、心配するように孫悟龍の所に駆け寄せる。

孫悟龍は、それを見て、やれやれと肩を竦めるからフンと楽しいように鼻を鳴らす。

.....
.....
.....
既に自分のログハウスにセルメダルを回収したから孫悟龍は、学園長に向き合わせる。

孫悟龍

「分かった？お前達の魔法は、さっきの化け物共に効かない事がある。それにお前達の中からさっきの人々みたいに努力をせずに誰より力を求め込むという愚かな欲望をもつ人がいるから化け物になるかもしれない……。化け物共は俺達が懲らしている。愚かな正義魔法使いであるお前達は手を出せない。俺達は、誰にも邪魔をさせずに自分の都合をする。」

孫悟龍

「それに化け物共は俺達を殺すという目的だけじゃなくて、何かを利用するから、人類地球を苦しめると目的をする。目的の邪魔をする俺達が居なくても誰がやるか？」

学園長は、くつと呻くように引き下げる。

学園長

「分かった……。化け物共は、お前達に任せとけ……。お前達にもう二度と邪魔しない……。」

孫悟龍

「よし。あつ、そうそう。言い忘れる。」

学園長

「む？なんだ？」

孫悟龍

「俺は、図書館島の全てへ行きたいと思う。許可をくれか？」

学園長

「うぬ？なぜ図書館島へ行くから何をやっているか？」

孫悟龍

「全ての神話の本と俺が知ってる本などを調べたいと思います。」
真面目にする。

学園長

「はあ〜。分かった。いいとも。ただし、本を散らかしてはいなくてくれ。」

諦めがある言葉で言う。

孫悟龍

「はいはい。もう一度に言う。お前達は俺たちともう二度と関係ない。」

投げ捨てるように後にする。エヴァとアスナも孫悟龍を追う。それと同時に結界を解く。

残った学園長とタカミチは孫悟龍が居なくなったからようやく息をする。孫悟龍のプレッシャーが凄い。

学園長

「ふーっ、その青年は確かにナギが言った通りだ。やはりこちら側の仲間にするなんて無理だ。」

タカミチ

「孫悟龍さんは、さっきの戦闘で本気を出せずに余裕そうで我々魔法使いをあつという間に圧倒的に押す。それに孫悟龍の仲間を無理矢理引き込むことも無理だ……」

学園長は、諦めのようなため息をする。

学園長

「そうか……儂らは、孫悟龍や彼の仲間に手を出せることができない……。もし、儂は、孫悟龍のことを上層部に報告するなら、間違いなく、世界最大の戦争をするかもしれない。」

タカミチは、それを聞いて、ゾッと恐怖で感じたように冷や汗しながら、一歩と下げる。

タカミチ

「やはり僕は、もう二度と本気で出る孫悟龍と闘えないのを誓うと思います。」

学園長

「うむ。それが良い……しかし、孫悟龍のさっきの言葉に一理ある。儂らは、正義の本当の意味を分らない……。昔の戦争で、英雄になるから、敵から英雄のことを憎悪をする人々がいる。孫悟龍らは、儂ら魔法使いの言葉に癪が出るかもしれない。それに儂ら魔法使いは、正義を考えるだけに戦争に巻き込まれた人の気持ちを知らない……」

タカミチ

「確かに……。」

学園長とタカミチは顔を俯く。

帰る途中にエヴァが満足な顔になり、孫悟龍とアスナは、冷静のま
まに歩く。

エヴァ

「クククク。ハハハハハハ！まさか、愚かな正義魔法使い共は、
面白い顔を出た！！なあ、鷹宏！」

孫悟龍

「ふゝ、やれやれ。愚かな正義共は、都合が悪いときに自分が間違
えない正義を考えるように悪い記憶を消しているかもしれない。け
っ…やっぱり正義は臭い。」
吐き捨てるように言う。

アスナは、賛同するように頷く。

孫悟龍

「そうだ。アスナとエヴァ、お前達はどうする？」

アスナ

「えっ。うゝん、今のままでは、愚かな正義の魔法使いは、鷹宏兄
さんの話を信じられないからまだ私を物扱いにするかもしれない。
やはり鷹宏兄さんのログハウスに居たい。」

孫悟龍とエヴァは、ハトが豆鉄砲食らったような顔になった。

エヴァ

「（まさか、おまえも、鷹宏を好きになった……。それに鷹宏は、アスナの気持ちを気付けた。）」

アスナ

「あの……。居たくはダメか？」

孫悟龍は、考えるように顎を手当てる。考え終わったら、顔が上げる。

孫悟龍

「…大丈夫だ。部屋はまだ空く。エヴァも俺のログハウスに居たいか？」

エヴァ

「む？私も居たいと思います。でも、なぜ私と一緒にいるか？」

孫悟龍

「ああ、俺もアスナもエヴァも元々独りぼっち同士だ。まあ、エヴァとアスナの気持ちを分かっている。」

アスナとエヴァは、孫悟龍の言葉を聞けて、驚愕していた。

アスナとエヴァは、なぜお前は、私の気持ちを分かるか？と分からないように考える。

孫悟龍

「フフ。まあ、俺からお前達の気持ちを言わない。お前達から気持ち

ちを本音のように言う方が良いと思う方が良い。(くすくす、やはりお前達まで俺を好きになってしまふ。ふゝ、やれやれ。)」
微笑に優しそうに言いながら、内心で、慈愛がある女神な笑みを浮かべながら、肩を竦めた。彼は、自分のログハウスに帰る。

アスナとエヴァは、孫悟龍を見て、隣と見合いながら彼の言葉を分らないように傾げる。

第3話 再会と嫌悪と襲撃（後書き）

次回予告

3年間にアスナとエヴァと共同に生活するから、3年後、彼は高校生を卒業する。

孫悟龍

「とうとう中学一年生の先生になる。アスナは、中学一年生になった。エヴァも中学一年生に繰り返した」

エヴァ

「私は、鷹宏の授業をしたいと思うために覚悟を決めて、鷹宏から登校地獄と似ている優しいように呪いをかけられて、中学生をするでも鷹宏は、私を忘れた者達を見るように胸が苦しい。」

アスナ

「鷹宏兄さんは、エヴァの友達が確かにエヴァの孤独をさせないようにエヴァを忘れなくたいと思う。」

孫悟龍

「それに、学生メンバーは、原作と全く同じだ。それにまだ俺が調べたい本を調べる為に、図書島へ行く。男性苦手を持つ前で髪を隠れる少女と出会う。」

のどか

「あのー、…お、おまえは、沢山の読書を読むか…?」

孫悟龍

「なんと!!のどかと仲良そうに一緒に帰る途中に、宇宙海賊とヤミーが出現する所為で原作と違うようで、のどかは、魔法だけじゃなくて、俺達の非日常もバレてしまった!？」

第4話「まさか、原作メンバーの一人、原作より早くバレる!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930u/>

魔法先生ネギまと異世界のサイヤ人

2011年11月15日13時12分発行